

沖縄県立埋蔵文化財センター 企画展

発掘調査速報展2015 別巻

沖縄県の戦争遺跡

沖縄県戦争遺跡詳細確認調査の成果



目次

沖縄県内の戦争遺跡の現状	1
沖縄戦以前の戦争遺跡	
(1) 海底線関係施設	2
(2) 中城湾海軍需品支庫	じゅうじょうわんかいぐんそくひんしきこ
(3) 海軍望楼・海軍特設見張所	みはりじよ
(4) 中城湾臨時要塞	3
(5) 船浮臨時要塞	ふなうきりんじよさい
(6) 防空監視哨	かうくうかんししào
(7) 戦争に関連する施設・記念碑	きねんひ
沖縄戦の戦争遺跡	
(1) 飛行場	6
(2) 司令部壕	しれいぶごう
(3) 陣地	じんち
(4) 特攻艇密匿壕	とくこうていひそきごう
(5) 学徒隊壕	がくとだいごう
(6) 病院壕	びょういんごう
(7) 官公 斧壕	くわんこうばくとうごう
(8) 御真影奉護壕	ごしんえいほうごう
(9) 住民避難地	じゅみんひなんち
(10) 偽陣地	いわづり
(11) 被災痕跡・破壊痕跡	ひざいこんせき はかいこんせき
(12) 収容所	しゅうゆうじょ
戦争遺跡の発掘調査	19
戦争遺跡の文化財指定	20
沖縄県の戦争遺跡に関する年表	21
米軍進攻図	22
第32軍主要部隊配置図	23
戦争遺跡分布図	24 - 39

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、平成 22 年度より平成 26 年度にかけて、近代、主に沖縄戦において残された戦争遺跡について、文化財指定などの保存を検討するために測量等の記録調査を行ってきました。

平成 26 年度は、これまでの調査成果をまとめた調査報告書の作成を行い、『沖縄県の戦争遺跡 - 平成 22 ~ 26 年度戦争遺跡詳細確認調査報告書』として年度末に刊行いたしました。ここでは、その内容の幾つかを紹介します。

沖縄県内の戦争遺跡の現状

平成 10 ~ 17 年度にかけて実施した「戦争遺跡詳細分布調査」では、県内において 979 ヶ所の戦争遺跡の所在を確認しました。今回、再度遺跡数を整理確認したところ、報告時点で 1,076 ヶ所（※ 2015 年 6 月時点での精査したところ、1,077 ヶ所）あることが判明しました。

今回の調査報告書では、現時点で沖縄県内の戦争遺跡を考えるうえで重要な 145 遺跡について測量図・写真・各種資料などを掲載いたしました。これらの戦争遺跡は、今後、関係者の理解や協力が得られることで、さらに詳細な調査が行われ、文化財指定などの保存そして公開活用が図られることが期待されます。ただ、今回掲載していない戦争遺跡も、今後の調査等によりその内容が判明することで、重要性が指摘されるものも当然埋もれているものと思われます。

なお、戦争遺跡の見学や調査は、危険な場所も多く、個人の所有地であるところも多く、各教育委員会や関係者などに調整・相談を行うようにしてください。

沖縄戦以前 の 戦争遺跡

今回の調査報告書では、第 32 軍が南西諸島防衛のため創設された 1944（昭和 19）年 3 月 23 日以前のものを、「沖縄戦以前の戦争遺跡」として位置づけました。現時点では、89 ヶ所が確認され、そのうち 28 ヶ所を報告書に掲載しました。これらの遺跡を次のアジャンルに分けて整理しました。

確認されている遺跡

- | | |
|-------------------|-------|
| (1) 海底線関係施設 | 1 ヶ所 |
| (2) 中城湾海軍需品支庫 | 1 ヶ所 |
| (3) 海軍望楼・海軍特設見張所 | 5 ヶ所 |
| (4) 中城湾臨時要塞 | 3 ヶ所 |
| (5) 船浮臨時要塞 | 23 ヶ所 |
| (6) 防空監視哨 | 5 ヶ所 |
| (7) 戦争に関連する施設・記念碑 | 51 ヶ所 |

(1) 海底線関係施設 (確認されている遺跡…1ヶ所)

日本政府は、1894（明治 28）年に日清戦争後の講和により台湾が日本の領有となつたため、鹿児島・台湾間に軍用海底線（ケーブル）を敷設しました。その施設として、通信所と海底線陸揚室が計画され、完成後は通信省により移管されたため同省が施工しました。また、軍用だけでなく、公衆用にも利用されました。

(2) 中城濱海軍需品支庫 (確認されている遺跡…1ヶ所)

海軍は、日清戦争後の台湾経営において中城濱の重要性を認識しており、艦船が燃料等の補給のために臨時に中城濱に寄港する港湾施設である海軍需品支庫を 1896（明治 29）年に設置しました。

●崎枝の海底線跡 (石垣市指定文化財)

海底線を陸上の通信所につなげるための施設で、1896（明治 29）年に石垣周辺諸村に造られたものが現存しています。レンガを基礎とし、壁や屋根にコンクリートを張った建物です。建物全体に多くの弾痕が見られ、沖縄戦における米軍艦隊の攻撃によるものです。



崎枝の海底線跡 (石垣市指定文化財)

●佐敷の水槽 (給水タンク) 跡 (南城市)

中城濱海軍需品支庫の施設で、レンガ製の水槽です。約 5,000 石の敷池に本造の兵舎や石垣庫 2 構、水槽、水源地などがあったとされます。



佐敷の水槽 (給水タンク) 跡 (南城市)

(3) 海軍望楼・海軍特設見張所 (確認されている遺跡…5ヶ所)

(確認されている遺跡…5ヶ所)

海軍望楼とは、海上の見張りや艦艇間の通信や気象観測を任務とする施設で、元来は 1894（明治 27）年の日清戦争直前に制定された海岸望楼が、1900（明治 33）年に改称されたものです。沖縄県では、1904（明治 37）年に喜屋武と西表に開設されたようです。これらは建物跡などが確認されていますが、どちらとも 1907（明治 40）年以降に造られた船渠レンガが使用されていることから、第一次大戦が勃発した 1914（大正 3）年に再度設置された海軍望楼のものと考えられます。なお、後に海軍望楼は海軍特設見張所と改称されており、久米島町上田森や石垣市平久保崎などに現存しております。

●喜屋武海軍望楼跡 (糸満市)

現在は喜屋武神の展望台となっており、駐車場や付近の茂みに水槽や建物の基礎が確認されています。



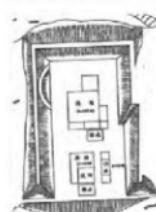
喜屋武望楼跡 区域 1 全景



●西表海軍望楼跡 (竹富町)

西表島の最西端に突きだした丘陵の平坦地に位置します。建物のコンクリート基礎や舷洋レンガ積みなどが確認されています。

西表望楼跡遺影



西表海軍望楼跡 (竹富町)
西表島の最西端に突きだした丘陵の平坦地に位置します。建物のコンクリート基礎や舷洋レンガ積みなどが確認されています。



建物跡
舷洋レンガ積み

●平久保崎海軍特設見張所跡（石垣市）

石垣島最北端の丘陵に位置し、見張所の基礎などが残されています。基礎の平面は八角形で、往々7mの大きさです。



(4) 中城湾臨時要塞（確認されている遺跡…3ヶ所）

中城湾臨時要塞は、1922（大正11）年に西表島船浮泊と同時に計画されましたが、同年に締結されたワシントン条約の軍縮によって中止されました。しかし、第二次世界大戦の勃発に伴う軍事情勢の変化により、真珠湾攻撃の半年前の1941（昭和16）年7月に、中城湾と船浮に臨時要塞部隊が編成されました。両方とも、重砲兵連隊を中心とした沖縄における本格的な常備軍として評価されます。

本要塞は、中城湾の警備を任務として、当初は与那原に要塞司令部・連隊本部、津堅島に第1中隊、伊計島に第2中隊、平敷屋に第3中隊、那覇に第4中隊が置かれました。その後、第2中隊は知念半島、第3中隊は小禄に移動し、第4中隊が廃止されるなど再編され、1944（昭和19）年の第32軍編成後には、重砲兵第7連隊と改称し、米軍上陸を迎える激しい攻防戦を繰り広げました。

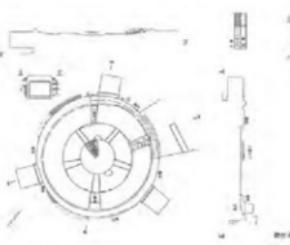


平敷屋砲台跡周辺 米軍 1944年9月29日 撮影
(国土地籍図空中写真 赤太線は沿岸路、青緑線は沿岸跡)

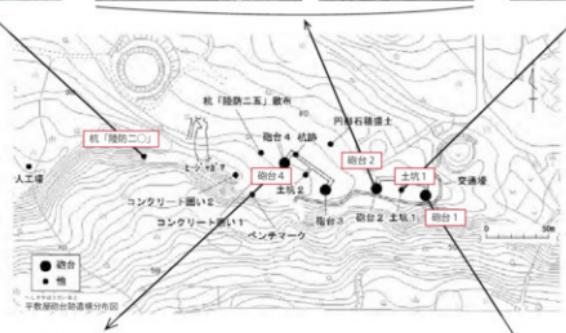
●平敷屋砲台跡（うるま市）

勝連半島のホワイトビーチが望める丘陵に、4基の砲台跡などの遺構が分布しています。砲台は、往々6mの幅塵に5本の櫓部を備える造があり、その構造から88式7センチ高射砲が据えられた可能性があります。また、砲台の排水溝に「十六年霜月」と刻まれており、砲部隊が1941年11月に戦備が整ったとされる資料と一致します。

霜月とは、11月の異称



平敷屋砲台跡 跳進図



(5) 船浮臨時要塞

確認されている遺跡 -23ヶ所-

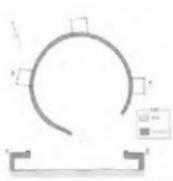
船浮臨時要塞は、中城湾臨時要塞と同様、1941（昭和16）年に建設され、西表島西部の祖納半島、外離島、内離島、サバ崎の4管区分が設置されました。戦後に大規模な開発がなかったこともあり、砲台、司令部、兵舎などが良好に残存しており、さらに詳細な調査が望されます。

●内離島砲台跡（竹富町）

現在は無人島である内離島の標高120 mの丘陵に、2基の砲台跡、弾薬庫跡1基が確認されています。その立地から、高射砲が据えられたと考えられます。

●内離島砲台跡（竹富町）

現在は無人島である内離島の標高120 mの丘陵に、2基の砲台跡、弾薬庫跡1基が確認されています。その立地から、高射砲が据えられたと考えられます。



船浮臨時要塞 稲名郡跡
建物基礎外観



（6）防空監視哨

確認されている遺跡…5ヶ所

防空監視哨は、敵機を早期発見する防空監視隊の見張所として、1943（昭和18）年には国頭・本部・金武・与那城・嘉手納・那覇・糸満・久米島・宮古島・石垣島・西表島の県内11ヶ所で設置されたものです。その管轄は、沖縄県警防護課となつており、消防などの任務に防空監視も加わったためとされます。監視は、在郷軍人などの有力者の下に、地元の生徒や役場職員などがあり、警察署を通して連絡業務を行つたようです。



内部

● 与那城防空監視哨跡（うるま市）

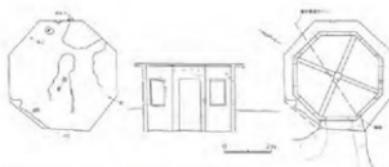
屋慶名集落付近の標高15mの丘陵頂部に位置し、金武湾を一望できます。平面が八角形で、平久保崎海軍特見張所などに類似しますが、径3.8mとやや小ぶりなものです。



与那城防空監視哨跡



天井より金武湾を臨む



内部図面



内部図面

（7）戦争に関連する施設・記念碑

確認されている遺跡…51ヶ所

直接戦争に関連するものではありませんが、戦意・愛國心を高揚する場もしくは役割を担つたと考えられる施設・記念碑も戦争道路の一ジャンルとして捉えられます。大きく3つの種類（忠魂碑・奉安殿・天皇御体記念碑）があります。

忠魂碑・・・27ヶ所

戦死した兵士を祀った記念碑で、日露戦争後に多く造られた石碑

● 旧美里村の忠魂碑（沖縄市指定文化財）

1934（昭和19）年、旧美里尋常高等小学校内に建立されたものです。忠魂碑は、錦弾形で台座には星形が刻まれています。



● 座間味村の忠魂碑（座間味村）

1941（昭和16）年、現在の座間味小学校の裏手にあり、県内で一番最後に造られた忠魂碑です。



座間味村の忠魂碑



座間味村の忠魂碑



座間味村の忠魂碑

（説明）木村十郎作成の「忠魂碑」

奉安殿・・・4ヶ所

御真影（学校に下閣された天皇・皇后の公式肖像写真。沖縄県が一番最初に下閣された）や教育勅語を保管するための施設

- 石垣市登野城小学校の奉安殿（石垣市指定文化財：歴史資料）

1930(昭和5)年、旧曾野城尋常高等小学校の奉安殿として建設されたものです。アーチ状の屋根には菊花紋がレリーフされています。



曾野城小学校の奉安殿



木造の構造

天皇関係記念碑・・・20ヶ所

天皇の即位や皇太子の誕生・「御成婚」、「紀元二千六百年祭（昭和15年）」の記念碑



●川平のミンカザント（伊江村）

1934（昭和15）年の紀元二千六百年を記念し造られたセメント製の貯水施設です。



●糸瀬市山巣毛の国旗掲揚台碑（糸瀬市）

1933（昭和8）年の皇太子誕生を記念して翌年に造られたものです。

沖縄戦 の 戦争遺跡

沖縄戦の戦争遺跡は、詳しい内容が不明なものも含めて985ヶ所（※2015年6月現在 986ヶ所）を数え、そのうち117ヶ所を掲載しました。これらの遺跡は、次に12ジャンルに分けて整理しました。なお、各ジャンルの遺跡数のうち複合としたのは、数ジャンルにまたがっているものです。また、この12ジャンル以外に、その他（16ヶ所 戦争に関連する建造物や碑など）、性格が不明なもの（71か所 性格が不明な人工壇や自然洞穴など）もあります。

確認されている遺跡

- (1) 飛行場.....12ヶ所
- (2) 司令部壇.....単体 9ヶ所、複合 1ヶ所
- (3) 陣地.....単体 309ヶ所、複合 43ヶ所
- (4) 戦攻艇秘匿壕.....単体 20ヶ所
- (5) 学徒隊壇.....単体 3ヶ所
- (6) 病院壇.....単体 13ヶ所、複合 3ヶ所
- (7) 宮公庁壇.....単体 9ヶ所、複合 4ヶ所
- (8) 御真影奉安壇.....単体 4ヶ所、複合 1ヶ所
- (9) 住民避難地.....単体 407ヶ所（※2015年6月現在 408ヶ所）、複合 38ヶ所
- (10) 偽陣地.....単体 1ヶ所
- (11) 破壊痕跡・破壊痕跡.....単体 67ヶ所
- (12) 収容所.....単体 1ヶ所

(1) 飛行場

(確認されているもの) 12ヶ所

第32軍は当初、航空作戦を準備するための飛行場建設を主な任務としており、最終的に15ヶ所の飛行場が沖縄県内に造られました。戦後、滑走路や閑連施設の大半は消失してしまいましたが、飛行機を格納する掩体壕、戦闘指揮所などが確認されています。

●高良の掩体壕跡 (那覇市)

現在は航空自衛隊那覇基地内にあり、海軍小禄飛行場に伴うものとして造られたようです。飛行場は1933(昭和8)年に造られましたが、大規模な整備が始まったのは1943(昭和18)年以降なので、この掩体壕もそのころに造られたと考えられます。現存しているものは飛行機の後部部分を収容する部分で、本体は幅30mにも及び、大型の飛行機を格納していたものと推測されます。



高良の掩体壕跡 正面

●大浜の掩体壕跡 (石垣市)

2013(平成25)年3月まで利用されていた旧石垣空港の滑走路北西側に位置するもので、1944(昭和19)年に建設された石垣島海軍南洋飛行場に伴うものとして造られたようです。掩体壕の深さは最大15mあるので、小型の飛行機が格納されていたものと思われます。



大浜の掩体壕跡 施設図

●陸軍宮古島中飛行場戰闘指揮所跡 (宮古島市)

野原集落の南西側の塩地に位置し、1944(昭和19)年に建設された陸軍宮古島中飛行場に伴うものと考えられているコンクリート構築物です。



陸軍宮古島中飛行場戰闘指揮所跡 施設図

(2) 司令部壕

(確認されているもの) 2ヶ所、複合1ヶ所

沖縄県に配備された第32軍、海軍沖縄方面根拠地隊、各師団・旅団は、通信・連絡・指揮機能をもつ中枢としての司令部をそれぞれ有しています。これらの司令部は、当初陸上に行政施設や学校などの建物を利用していましたが、戦況悪化に伴い、人工壕や自然洞穴に移転することになりました。また、司令部壕は戦況に合わせ、数度移転したものもあります。

●第32軍津嘉山司令部壕 (南風原町)

第32軍司令部壕は、1944(昭和19)年4月22日より南風原町津嘉山に当初構築されました。この一帯は軟質な地盤であるクチャ層のため、構築しやすい反面、強度に問題がありました。戦後に埋められたために長らくその実態は不明でしたが、南風原町教育委員会が2005・2006(平成17・18)年度に通過建設のため発掘調査を部分的に行うことにより、その存在が明らかになりました。

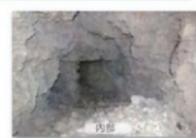


津嘉山司令部壕跡 真把砲台付近

真把砲台付近



津嘉山司令部壕跡 真把砲台付近



内部

●第32軍首里司令部壕 (那覇市)

1944(昭和19)年10月10日の10・10空襲により、更に強固な砲塔部壕が必要となりたため、12月以後に首里城の地下で構築が始まりました。当時「一大地下ホテル」とも称された約1,000m以上の大規模で常時灯火がともされていた據があったようです。安全面の配慮のため、現在は公開されていません。



首里司令部壕跡 第3坑口付近



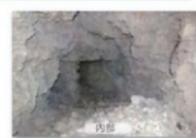
第3坑口付近

●第32軍牧文仁司令部壕 (糸満市)

第32軍司令部は、米軍上陸後の戦況が絶望的となった1945(昭和20)年5月後半に、牧文仁の89高地と呼ばれた自然洞穴を利用した陣地壕に移ることになりました。その後、6月23日に第32軍司令官牛島潤と謀謀長長勇は自決し、日本軍の組織的な戦闘が終了したとされます。しかしながら、一部の部隊の抵抗が見られたため米軍の掃討戦は続き、多くの住民の苦しい避難が継続しました。



伊文に田代洞窟付近



●読水海軍司令部壕（那覇市）

現在は陸上自衛隊部隊基地内にあるもので、海軍部隊の司令部壕として最初に造られ、10・10 空襲以前に利用されていたようです。地面にコンクリートで天井を構築した直線的な壕で、戦前にあまり遡りませんでした。



読水海軍司令部壕跡 棚口



通路



読水海軍司令部壕跡 施設図（前面分布開拓地付近）



アーチ型の天井

●豊見城海軍司令部壕（豊見城市）

現在は「海軍壕」として広く利用され、観光客が多く訪れます。10・10 空襲時には、読水司令部壕では大きく被災したため、更に強固な壕を豊見城の丘陵に構築しました。部分的にコンクリートを利用することや、アーチ型の天井は海軍が構築した壕の特徴と考えられます。



案内図



通路

存続部

●西更竹司令部壕（宮古島市）

宮古島の中央部にあたる城岱と長嶺の丘陵地に位置し、地元では知られていましたが、宮古島市教育委員会の調査でその存在が明らかになりました。総延長約 220m にも及ぶ人工壕で、直線的な通路に 18 もの小部屋が規格的に取りつけ構造であることから、司令部としての性格が想定されました。近隣の西城小学校に第 60 旅団司令部が置かれていたとされており、この壕を利用していたものと考えられます。



西更竹司令部壕跡 通路



西更竹司令部壕跡 施設図（前方高台地開拓地付近）



通路



通路



通路

●呑門海軍砲台跡（那覇市）

現在は航空自衛隊部隊基地内であり、西側に広がる東シナ海を含めた周囲が望める丘陵に位置します。大砲を設置しその空室を築うための掩体をコンクリートで構築しており、前面が一部損壊している他の非常に残りが良いものです。大砲は口径 20 cm 砲で、重巡洋艦の主砲を転用したものと考えられます。沖縄戦で使用した大砲が唯一原位置で保存している極めて重要な施設です。

①砲台

大砲などの火器を設置するための台座を中心とした施設で、弾薬庫などの連携施設をもつものもあります。

●辺防海岸の砲台跡（読谷村）

辺防海岸に突き出た石灰岩の岩場を利用して砲台跡で、南を向いています。岩場の前面に厚さ 1 m のコンクリート壁を設け、西側に大砲が設えられる窓口、東側に使って小鉄・機関銃などが構えられる鉄扉が設けられています。



辺防海岸の砲台跡 通路



通路内蔵戸口跡



辺防海岸の砲台跡 施設図



西側の砲台跡通路



西側の砲台跡

●当間海軍砲台跡（那覇市）

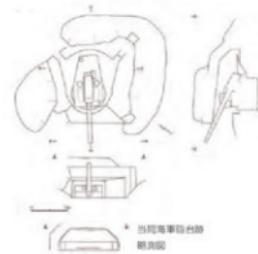
現在は航空自衛隊部隊基地内であり、西側に広がる東シナ海を含めた周囲が望める丘陵に位置します。大砲を設置しその空室を築うための掩体をコンクリートで構築しており、前面が一部損壊している他の非常に残りが良いものです。大砲は口径 20 cm 砲で、重巡洋艦の主砲を転用したものと考えられます。沖縄戦で使用した大砲が唯一原位置で保存している極めて重要な施設です。



当間海軍砲台跡 窓口



通路内蔵戸口の露出状況



* 当間海軍砲台跡 施設図



防護大門の様子

②トーチカ・ 銃眼・銃座台

日本軍は、基本的に水際防衛を第一としており、沖縄各地でも海岸にトーチカ・銃座・鉄筋を配した水際陣地を多く造っています。

- トーチカ…コンクリート製の防御陣地で、監視を兼ねた坑が構えられる窓(鉄扉)をもつもの。
- 銃眼…全体がコンクリート製ではなく、窓が1つしかない構造を便宜的に称したもの。
- 銃座…窓ではなく、擁壁などに銃身を通すための溝などが構られたもの。

●ギナン原のトーチカ跡（恩納村）

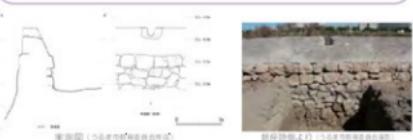
瀬良浜海岸の干潮時は歩いて渡れる小島に、裸が多く混じったコンクリートで造られた鉄筋です。結構は海側に向いているのではなく海岸を向いており、上陸した敵を背斜るために造られたものと考えられます。なお、恩納村の海岸には、本道跡を含む4つの鉄筋が現存しています。



（恩納村教育委員会提供）

●川田・塩屋の銃座跡（うるま市）

中城間に面した字川田・塩屋・前原の海岸に造られた鉄筋がこれまで115基確認されています。銃座は、護岸の上部であるコンクリート部分に一辺20～50cmを凹形で掘り込まれたもので、小銃や機関銃などが構えられるようになっています。現在は、護岸改修工事が行われ日々に消滅しています。

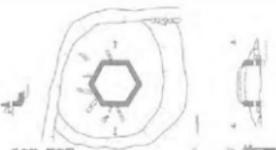


西壁・奥より

（うるま市教育委員会提供）

●津覗のトーチカ跡（中城村）

海岸低地にある津覗集落の南東側に位置し、村指定文化財の群れ「津覗のテラ」の敷地内にあります。トーチカはコンクリート製で、平面形が六角形で直径3mを測り、鉄筋は内陸側の東側に4ヶ所設けられています。中城村教育委員会が試掘調査を行いましたが、このトーチカへの入口は明確になっていません。



上面（中城村教育委員会提供）



南西より（中城村教育委員会提供）



内部（中城村教育委員会提供）



北西より（中城村教育委員会提供）

●万座毛の銃眼跡（南大東村）

北元で万座毛と呼ばれる南大東島の南東端の海岸絶壁に設けられた鉄筋です。岩壁を掘り込んだ高さ1m、長さ10mの凹溝をくくると、側面に向かコンクリート製の鉄筋が設けられた小部屋に至ります。南北大東島では、このような鉄筋が海岸一帯に設けられており、当時の陣地要図などの資料も多く残されており、日本軍の水際作戦をうかがい知るために重要な道路です。



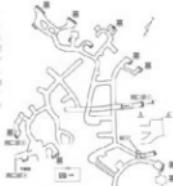
③陣地壕

自然洞穴を利用したり、地質に合わせてダイブライトによる掘削、削岩機やツバハシなどで塹を掘り、坑道式陣地と称されたものです。鎌倉と海軍でおおまかな傾向があり、前者は通路幅が1~2mで天井を補強する木杭を入れたものが多く、後者は通路幅が2~3mと

広く、天井がアーチもしくは台形状、コンクリートを使用使用することも多く見られます。また、沖縄特有の堅い亜粘土などの基盤を利用して延長や連結させた陣地壕も特徴的なものです。

●辺1丁目（城邑）の陣地壕跡（那覇市）

現在は城邑公園の敷地内で、丘陵斜面に多く造られていた庭込み墓を利用した陣地壕です。縦口を出入り口として、複数に張り巡らされた通路は総延長約300mを測ります。部分的に2層構造となっていたり、階段も多く見られるなど複雑な構造で、長期的な軌跡に備えたものと考えられます。



辺1丁目（城邑）の陣地壕跡 那覇市
(沖縄支2004年1月撮影)



辺1丁目（城邑）の陣地壕跡 縦口

●波波迫迫砲陣地跡（糸満市）

波波集落北側の東西に伸びる丘陵に、迫撃砲掩体3基、人工壕2基が確認されています。迫撃砲掩体とは、出入り口を設けた一辺3~4mの郷方面形の土坑（アベ）に長さ6~7mの坑道が設けられたものです。当時の軍事史料を参考にすると、土坑に迫撃砲を配し、坑道は弾薬を一時保管したり、砲兵が一時避難した場所と考えられます。



波波迫迫砲陣地跡 3 北より



波波迫迫砲陣地跡 3 北より



波波迫迫砲陣地跡 通路分布図

●黄金山の陸軍本部壕跡（北大東村）

北大東島の北西に位置する黄金山と称される丘陵の中腹にある人工的に掘削された切通し（ワイトカイ）の間に築造されたものです。このうち、北側に設けられた堆は、出入口を3か所に設けた平面がE字形のもので、中央の部屋にはコンクリートで丁寧に造られた梁があり、ここに御真影が保管されていたようです。



黄金山の陸軍本部壕跡群 銚浜園
(沖縄支2004年4月)



御真影壕跡

●北山の陣地壕跡群（渡嘉敷村）

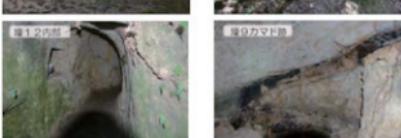
渡嘉敷集落より北約1.5kmの北山（ニシヤマ）と呼ばれる標高200mに近い山間部中腹に現在22基の人工壕が確認されています。多くは、長さ数m前後の貫通しない様ですが、小部屋が幾つか設けられた2か所の出入口を有するものや、全室がカマドにして通道が抜けられた堆があります。米軍が上陸した3月27日以降に、渡嘉敷島に配備されていた海上挺進第3戦隊が造ったものとされ、長崎戦に備えたものと想われます。なお、本壕跡群より北側の山間部には、漁により住民が移動させられ「漁回自決」が行われた場所があります。現在は、国立沖縄青少年交流の家に譲渡しており、この施設内より出入りでき、また渡嘉敷村により散歩道が設けられており見学が可能です。



北山の陣地壕跡群 通路



本壕跡群 通路



北山の陣地壕跡群 通路分布図 (渡嘉敷村那波那波古跡的特征をもとに作成)

地図

●こぶき山の陣地壕跡（那覇市）

現在は田原公園の敷地内にあたる從来はカテラムイと呼ばれていた丘陵に掘り込まれたものです。当時、高所からこの丘陵を見ると「寿」の字に見えただことから、日本軍が名づけたものとされています。高窓の巻（いわき）部隊が構築を使用したもので、コンクリートを用いたアーチ形の天井があるなど、海軍の像として特徴的なものです。現在は、安全のため立ち入ることが出来ません。



こぶき山の陣地壕跡 コンクリート部分のアーチ型天井



天井

④監視所

丘陵頂部など見晴らしが良い山に立地し、監視官を有するものです。

●亀池港北側の海軍監視所跡（南大東村）

南大東島の南端。その外周を巡る断崖の頂部に位置し、当時の要塞にも記載されたコンクリート製の海軍監視所跡です。天井部が六角形を呈し、内法径2mの部屋が監視室所となり、四面を監視できるようになっています。また、監視室屋に塗る階段部の壁面には、「昭和20年5月1日建立」と構築した兵士の名前が刻まれた銘板があります。



道標



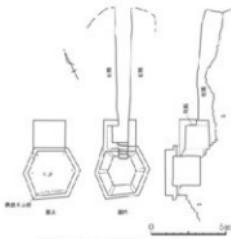
天井全景、北より



天井部側面外観



内部監視所より出入口



亀池港北側の海軍監視所 路線図



内部壁面の横顔記念銘版



南側監視室



天井部の剥落「コノモノトルナ」

⑤戦闘指揮所

一定の形態ではありませんが、丘陵頂部や先端部に位置し、海辺陣地の中的な位置であった戦闘時の拠点と考えられるものです。

●161.8高地陣地の戦闘指揮所跡（中城村指定文化財）

現在の沖縄消防学校北側にある、当時日本軍より 161.8 高地と呼ばれた陣地の拠点とした戦闘指揮所跡です。戦闘指揮所跡は、岩盤に楔とコンクリートにより造られた4ヶ所の窓をもつトーチカと、その下層にある地下壕で構成されています。本陣地では、1945（昭和 20）年 4 月 5～7 日にかけて日米間で激戦が行われ、米軍側は「ビナルロック」と呼んでいました。



出入口



出入口より内部（中城村指定文化財）



161.8高地陣地の戦闘指揮所跡 路線図



米軍作成 161.8高地指揮所図 (Intelligence map) (略)

⑥通信所

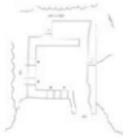
コンクリート製の方形構造物のひとつトーチカと称されること多かったのですが、実は大きくて見通しが良くない場所に造られたので、資料から通信所として考えられるものです。

●弁ヶ嶽の通信所跡（那覇市）

弁ヶ嶽は、第 32 軍司令部のあった首里城から東約 1 km に位置する丘陵にあり、標高 167.5m と周辺で最も高所で、また首里王宮の重要な祭紀場でした。厚さ 60 cm のコンクリート製構造物で、6 口の窓があり、鉄網というよりも通常の窓と考えられます。首里の司令部壕とほぼ同時期の 1944（昭和 19）年 12 月 1 日に、弁ヶ嶽に通信所の構築が始まったとされ、司令部に隣接する通信所の一つと考えられます。



弁ヶ嶽の通信所跡 近景



弁ヶ嶽の通信所跡 縮図



内天井の構造部分

(4) 特攻船秘密匿跡群（比謝川沿いの特攻船秘密匿跡群（誘谷村）

確認されている遺跡・単体 2ヶ所

陸海軍による小型船舶による特攻作戦に用いた特攻艇を秘匿する場です。全長 10～20m、幅 2～4m、高さ 2～3m の直線的な壕が多く、一定の間隔をあけて数基構築されるものもあります。沖縄戦の特徴的な壕で、本土各地でもその決戦に備えて多く造られました。

●比謝川沿いの特攻船秘密匿跡群（誘谷村）

比謝川河口に面した北岸に構築されたもので、現存 6 基確認されています。これらは、幅・高さ 2m で、直線的に掘削され、長さは 15～30m の間です。海上雷撃基地第 29 大隊が 1944（昭和 19）年 12 月から造ったもので、海上雷撃第 29 軍隊の一部が翌年 2 月 17 日に配備され、米軍本島上陸直前の 3 月 29 日に米軍艦船へ攻撃したようです。



比謝川沿いの特攻船秘密匿跡群、遺跡



比謝川沿いの特攻船秘密匿跡群、概略図 (昭和 19 年 3 月)



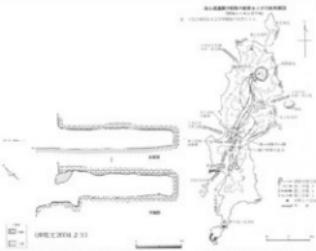
遺跡



内部

●渡嘉志久海岸の特攻船秘密匿跡群（渡嘉敷村指定文化財）

現在渡嘉志久ビーチとなっている海岸後方に丘陵地の千枚岩質の岩盤に埋り込んで構築されたものの、現存 1 基のみ確認されています。幅 3m、高さ 2.1m、長さ 12m の人工壕となっており、海底ではレールが転がっていたとのことです。1945（昭和 20）年 3 月 25 日には慶良間諸島に米軍艦艇が侵入しましたが、配備されていた海上雷撃第 3 軍隊への出撃命令は下されず 3 月 27 日には、同部隊は長期戦を準備するために北山の陣地に移動しました。



渡嘉志久海岸の特攻船秘密匿跡群、概略図



渡嘉志久海岸の特攻船秘密匿跡群、海景



壕内部

(5) 学徒隊壕（学徒隊壕（那覇市）

確認されている遺跡・単体 3ヶ所

日中戦争ごろから、沖縄でも学生（学徒）の勤労動員は始まっており、米軍の攻撃が始まつた 1945（昭和 20）年 3 月 23 日頃に、訓練を受けた男子学生は各校で結成された鉄血勤皇隊などへ、女子学生は主に看護補助要員として沖縄陸軍病院や各地の野戦病院などに配備されました。学徒隊壕としたのは、男子学生や教職員が構築もしくは避難した壕です。

●畜道壕跡（那覇市）

首里城内の鹿児島である東のアザハの城壁の下に掘削された壕跡です。沖縄師学校男子部の上級生や教頭員によって、1944（昭和 19）年半ばころには掘削が始めり、翌年 3 月中に完成したようです。本来の畜道の出入り口は 3 か所と見えられ、直線的な坑道が横幅に窄がっており、総延長 130m を測ります。最も奥側の坑道は、3 月下旬に沖縄師学校が利用し新聞発行を行っていたため新聞社壕とも呼ばれます。この出入り口付近からは多款のワルミモレッシュはショルミン製の活字が出土しております。また、西側には自然洞穴があり内部は丁寧に石敷きが施された廻所があります。また、首里第 1 国民学校・原町第 1 中学校・師範学校の街並みが一時的に保管されたとのことです。



新聞社壕の廻所前面付近で出土した活字

(6) 病院壕 (確認されている遺跡…単体 13ヶ所、複合 3ヶ所)

1944（昭和 19）年の 10・10 空襲を契機に、これまで地上にあった病院施設が地下壕に移され、沖縄陸軍病院は南風原に、各師団等の野戦病院壕も各地に造られました。1945 年 4 月以降の戦況悪化に伴い、本島南部の壕に分室が造られたり、第 32 師が南部へ撤退した 5 月後半以降には、沖縄陸軍病院も本部、第 1～3 外科に分かれて喜屋武半島の壕に分散してきました。

●沖縄陸軍病院南風原壕跡群 (南風原町指定文化財)

黄金森と通称される秋興の完石切石の丘陵全体に構築された人工工事です。沖縄陸軍病院は、1944（昭和 19）年 9 月には、非常時に備えて黄金森一帯の丘陵に病院壕の構築を始めました。10・10 空襲を契機に、病院壕に隣接する南風原国民学校に病院機能が全て移動することになり、米軍の攻撃が始まった翌年 3 月末には壕を利用することになりました。病院壕は 30 基ほどあったとされ、高さ・幅が 1.8～2.0m、長さ 10～70m で、各壕を結ぶように横方向の坑道も見られます。この壕では、外傷患者の手術は麻酔無しで患部切開されることになり、南風原に隣接して重症患者には青酸ガス入りのミクイクが飲まされたりといった多くの証言が残されています。南風原町教育委員会では第 2 外科として利用された 20 基の壕が現状踏査を行い、その成果を元に公開活用がされています。



●第 62 师団野戦病院原那原分室壕跡 (西原町)

現在沖縄キリスト教学院大学が建つ丘陵北側斜面の軟質の岩層間に掘り込んだ人工工事です。第 62 师団野戦病院原那原分室として、1944（昭和 19）年 9 月から構築が始まり、翌年 2 月から解散命令が出される 5 月初めまで利用され、西原町出身の婦女子多数が補助看護婦として召集されたそうです。壕は、本来は出入口が 3 か所があり平面 U 字形で、総延長 150m を測ります。壕の壁面や天井は扒きされた痕が残っています。



第62師団野戦病院原那原分室壕跡

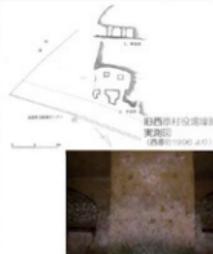
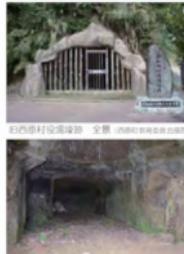
跡地現状

(7) 官公庁壕 (確認されている遺跡…単体 9ヶ所、複合 4ヶ所)

県庁や市町村役場等の官公庁では、10・10 空襲などを契機に空襲を書類保管や職員の避難などを目的として自然洞穴の利用したり、壕の構築を行いました。

●旧西原村役場壕跡 (西原町)

現在は西原町社会福祉団体連携課である当時の西原村役場に隣接する丘陵に掘られた人工工事です。1944（昭和 19）年 6 月頃に役場が人夫を雇い、書類保管のために構築されたこと、毎朝出勤してこの壕から書類を持ち出し役場で業務を行ひた万円度販売するといった証言があります。かつて土砂採取工事で一部取り取られており、現状では 2 か所の壕口に約 50 m の部分が見えれます。部屋内の壁面には国旗が刷まれており、あまり衝撃見せん。西原町教育委員会は 1985（昭和 60）年に、県内で初めて本格的な戦争遺跡の発掘調査を行っています。その調査では、倉庫の扉が出土しており、書類保管のために握られたという証言を裏付けることになりました。



西原村役場壕跡 全景 1 (西原町教育委員会提供)

内部 斧より (西原町教育委員会提供)

●シッポウジヌガマ (県廳・警察部壕跡) (那覇市)

現在の通称名宮園の一角落にある台地縁辺にある自然洞穴を利用し、人工的な凹道や部屋を設けた壕です。壕は約 200 m の横円形の自然洞穴の部分から、南に凹道が約 40m 程度、幾つかの部屋状の凹みや水溜などが削ぎ落されています。県厅・警察部の潜伏壕として、米軍上陸以前から構築されていた壕ですが、県廳知事らが移動したのは、1945（昭和 20）年 4 月 25 日とされます。この壕内では、知事や警察部長がいた部屋の他、各隊の宿舎が決められていたとのことです。知事らは日本軍が南部撤退が決定された後の 5 月 25 日に本壕を後にし、その後は轟の壕（糸満市）などを転々と移動しました。



シッポウジヌガマ 自然洞穴部分

カマド跡

シッポウジヌガマ (県廳・警察部壕跡) 実測図
(那覇市防災減災課提供)

(8) 御真影奉護塙

確認されている道路一帯4ヶ所、複合1ヶ所

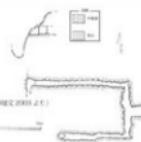
10・10空襲により、県は御真影奉護のため各地の学校に塙を造らせましたが、1945（昭和20）年1月には名護市大温帯の御真影奉護塙に移動させました。なお、宮古や八重山でもそれぞれ御真影奉護塙を造り、管轄下の学校のものが集められ保管されました。

●大温帯の御真影奉護塙跡（名護市）

原木林である源河の山間部の標高約120mの丘陵斜面に掘られた人工塙です。塙の全長は40mで、塙口から直線的に伸び平面コ字状となっており、その中央部に約2×3mの部屋が設けられています。おそらく、この部屋に御真影が保管されたものと思われます。同様の部屋は、宮古島市野添の御真影奉護塙でも見られます。



大温帯の御真影奉護塙跡（西原）



大温帯の御真影奉護塙跡 総測図（昭和20年4月）



塙内部



中央部奥壁

(9) 住民避難地

確認されている道路一帯407ヶ所（※現在408ヶ所）、複合38ヶ所

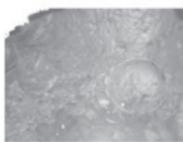
沖縄戦において、住民は10・10空襲以降に屋敷などの防空壕や近くの自然洞穴に、空襲警報の際に一時的に避難するようになりました。自宅から離れて本格的な避難生活は、米軍の空襲が迫った1945（昭和20）年3月下旬以降に始まりました。これらの住民避難地では、日本

兵によるスパイ疑惑や食料略奪のため住民への脅迫・虐殺などが行われたり、地元召集の防衛隊員などから手渡された手りゅう弾などによって住民が命を絶つという「集団自決」などが起こりました。住民避難地の形態を、防空壕、自然洞穴、山間部の大きく3つで捉えることができます。

①防空壕

空襲の被害より避難するために地中に掘る穴や構築物のこと、全国的に造られています。沖縄県においては、その多くは10・10空襲がきっかけとなって造られよう。屋敷地内や集落から若干離れた丘陵部に造られたものがあります。調査しているものは、丘陵で見られるもので、通路の幅・高さが1m程度で、塙口が1ヶ所で奥が部屋となったものや、2つもしくは複数の塙口が連結したものなどがあります。

現存していませんが、西原町教育委員会と当センターが2005（平成17）年度に発掘調査を行った掛保久防空壕は、集落内に位置しており、平面がし字形の人工塙で多くの陶器皿や鉄錆、この場所で亡くなったりと思われる人骨1体が確認されています。



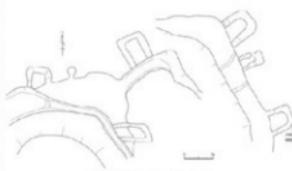
掛保久防空壕（西原町）



掛保久防空壕跡 総測図
（西原町）

●根路銘の防空壕跡群（大宜味村）

根路銘・大宜味の集落より約1kmの山間部の標高約120～130mあたりの谷部に位置しています。塙口が17ヶ所確認されており、そのうちの多くは2つの塙口がコ字形に整がったものの長さは8～10mです。塙は住民によって掘られ、米軍上陸後には多くの人々が避難していたことです。1945（昭和20）年4月中旬には、更に山深く逃げた人々もあり、逃げ遅れた者らには米兵によって斬害された人もいるようです。この大宜味村を含め、北部地域で山中に逃げた人々の多くは、6月中旬以降に下山し収容所に送られました。



根路銘の防空壕跡群 総測図

●愛米園の防空壕跡群（名護市）

那覇地島の北東には、現在はハンセン氏病患者の療養施設である国立療養所沖縄愛米園がありますが、戦時中は国頭愛米園としてハンセン氏（らい）病患者を隔離していた施設がありました。この敷地内に伸びる丘陵斜面には、現在では約 50 基の壕口があります。これらの壕は、1944（昭和 19）年に、園長の早田徳が入園者や職員の避難壕として計画し、入園者自身に掘削させたもので、早田徳とも呼ばれています。愛米園は、当時珍しかった数基のコンクリート建物が規格的に配設されており、軍事施設と異なっていたのが特徴です。愛米園は、当時珍しかった数基のコンクリート建物が規格的に配設されており、軍事施設と異なっていたのが特徴です。

壕は複数が連結したものが多く、総延長 60m の坑道に 10 以上の小部屋が取りつくものを見られます。坑道は幅・高さが約 1.5～2m と、他の防空壕より規模が大きく、車の指揮や沿道が可能な可能性も想定されます。



愛米園の防空壕（早田徳）跡群 壕分布図



愛米園付近の米軍 1944年5月
（撮影日撮影：空襲警報室
撮影者：ジョン・ヘンリッヒ）



中央部壕群



北角壕群



中央部壕群 通路



中央部壕群 力マド跡



南側壕群 通路と壁面の切り取り



壁面の移動



壁面の移動

●前川・山川の防空壕跡群（南城市・八重瀬町）

豊橋川上流域の両岸斜面に掘られた防空壕跡群で、南岸の前川には 60 余基、北岸の山川には 20 基の壕口が見られます。前川集落の住民は、10・10 部隊と共に本壕跡群を含む豊橋川沿いに居住が 2・3 世帯共同で防空壕を構築しました。米軍上陸直前には、この壕に避難した住民もいましたが、軍の命令によりここから別の場所に行かされたそうです。しかし、4 月下旬以降に再度戻ってきて住民もあり、その後天井に机木を設置した痕があり 20 名余の死者が本壕であったとのことです。山川でも、軍による住民の追い出しがあったようです。

壕の特徴としては、壕の高さは 1m 程度で、2つもしくは複数の壕口が内部で連結されたものが多めで、小部屋や明り取りの凹みや窓などが設けられています。ただ、壕の高さが 1.5m 以上あるものや、壁や天井に机木を設置した痕が見られる壕もあり、一部軍が構築・利用した可能性も考えられます。



前川・山川の防空壕跡群 壕分布図



前川の防空壕跡群 壕 1～6・22～25 沿線



壕 1～6 と施設



31 基 内部壁面の机木痕



前川・山川の防空壕跡群 施設図



壕 1 の施設



壕 5・6 の小部屋

②自然洞穴

沖縄県では多くの地域が連続サンゴ礁で形成されており、空隙の多い石灰岩が基盤となって、特に沖縄本島中南部や各島では多くの自然洞穴（方言名でガマ・アマなど）があります。これらは、その規模が長大なため当初は軍による陣地として利用されていたところも多いですが、本島の中南部では部隊が移動した後に住民が避難し、その後に車が戻るなど軍民が多数混在するような状況が生まれ、その内で骨泊・虐殺・「集団自決」などが起こったとされます。

●アハシャガマ（伊江村）

伊江島の北東にある段丘斜面の自然洞穴で、部分的に掘り広げたところや蓋として利用されたところも見られます。塚口は7つあり、一番大きい空間は約100mですが、全体としては200mほどしかありません。米軍上陸以前に、住民や傭兵で召集した防衛隊員が避難していましたが、米軍上陸後の1945年6月22日ごろに、砲撃やガス攻撃を受け死者が出ました。その後、防衛隊員が爆薬を爆破させ、住民を含めた100名以上が亡くなった「集団自決」が起こりました。



アハシャガマ 地図



●晋の塹跡（糸満市）

伊敷集落より南西方向約500mに位置するドリーネ状の長さ1km以上の自然洞穴です。首里にいた島田知事ら県庁職員らは、6月4・5日に本塹跡に避難してきたが、既に避難民が500～600名いたそうです。知事は16日にはこの塹を出る際に、住民に友軍と行動をともにせず米軍に投降せよといった証言があります。同じころに、日本兵の一団も見られ、環境が良い通所を占領し、住民への子殺しや食糧強奪もあったそうです。住民たちは、6月24・25日に米軍からの勅告を受け、集団投降しました。



晋の塹跡 塚口



晋の塹跡 塚所



晋の塹跡への通路



晋の塹跡 塚所

●チビチリガマ（読谷村）

波平集落の西側の谷にあるドリーネ状に座んだ自然洞穴で、南北2か所の洞穴があります。10×10m程度に、波平の住民はチビチリガマに空襲警報時などにその都度避難していたそうです。米軍上陸前の1945（昭和20）年3月末より、他所へ疎開しなかった住民が避難しました。その後、南側の洞穴で米軍の投擲の弾びかけに反撃したものがいたり、自決についての悪い夢が起きて、子供の報告や看護婦が親族に毒薬を注射したり、火をつけたり、83名の人々が亡くなる「集団自決」が起こりました。一方、北側の洞穴に避難した人々は米軍により救出されたようです。



チビチリガマ



海口付近

●チンガーガマ（宜野湾市）

我古吉集落の地下には長さ約170mの自然洞穴があり、集落内にはこれと連結している井戸が5カ所見られます。このチンガーガマに避難していた人々は、5月14日に米軍により救出されました。



チンガーガマ 井戸入口

③山間部

本島北部や渡嘉敷島、石垣島などの急峻な山間部があるところでは、山間部に避難した住民もいました。山間部の住民避難地では、隠立小屋やカマドの痕跡などが確認されているところもあります。また、渡嘉敷島のように「集団自決」が起こった事例や、石垣島などではマラリアの蔓延で苦しんだ人々もいます。

●白水の住民避難地跡（石垣市指定文化財く名載白水の戦争遺跡群）

於茂登岳東方の白水地域の標高約50～100mの山間部、名蔵川の支流であるシヤミズイガラ川に位置します。この場所には、曾野城や大川の住民が避難していたという証言があり、カマド跡などが確認されます。ただ、多くのタコボや鰐塚も分布しており、独立自動車第264中隊が駐屯していたことから、本來に軍が使用していた場所と考えられます。なお、八重山支庁が造った塹も見られ、そのうち一つは御真面目塹跡です。



白水の住民避難地跡　道筋分布図



カマド跡



石川岳の住民避難地跡　平塹1付近



平塹3



石川岳の住民避難地跡　略測図

(10) 假陣地（確認されている遺跡一単体1ヶ所）

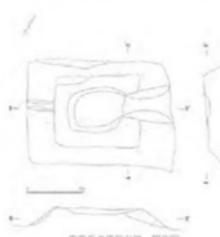
大砲などに似せて造られたもので、現存していませんが戦車・飛行機などに似せた偽兵器が多く造られたようです。

●真鼻毛の偽砲台跡（粟国村）

粟国島の最西端の真鼻（単ん岬）を見下ろす台地に位置します。偽大砲を羅えたとされる盛土で造られた基礎が残っております。粟国島には、日本軍は配備されておらず、在郷軍人や警防団がカモフラージュのため構築したとされています。



米軍撮影写真の偽砲車（左）・偽飛行機（中）・偽砲台（右）（栗国島山頂部）



真鼻毛の偽砲台跡　遠景

丘一面

●石川岳の住民避難地跡（恩納村）

現在は石川少年自然の家にある石川岳農業道沿いで、標高約130mの山麓内を流れる小川沿いに見られます。1945（昭和20）年3月23日の空襲以降に、石川の住民がこの辺に避難したことされます。遺構としては、小川沿いの山麓に取りつくように、掘り込んで造成された平塹が3か所見られます。そのうち平塹3は、18m×3.6mの空間を造成し、カマド跡と考えられる石組が見られ、避難小屋跡ではないかと考えられます。



石川岳の住民避難地跡　平塹1付近



平塹3



陶器落駆跡状況

(11) 被災痕跡・破壊痕跡 確認されている道路…単体 67ヶ所

①被災痕跡

確認されている道路…単体 63ヶ所
爆弾や砲弾を受けた痕跡が建物や壁、地面などに残存したものです。

●公益質屋跡の弾痕（伊江村指定文化財）

現在の伊江村中央公民館の西側にある1927（昭和2）年に造られた公益質屋には多くの弾痕や破壊されたのが見られます。当時、日本の伊江島での拠点であった複数陣地、後退する城山が見られることから、米軍との上陸戦で破壊されたものと思われます。



伊江村公質屋跡の弾痕

●愛楽園の給水タンクの弾痕（名護市）

屋久島の当時の園頭愛楽園では、多様なコンクリート建築物があったため、かなり集中的に飛行機から機銃が撃ち込まれ、壁や給水タンクに多くの弾痕が残っております。



愛楽園タンクの弾痕

●瀧邊郵便局の爆弾穴（南城市）

世界遺産となっている琉球王前時代の原図跡である瀧邊街跡に残られる直径 12 ~ 13m の構円形、深さ 2m の凹窓穴で、通常は水が溜まって小池のようになっています。米軍による爆弾や爆撃による爆弾穴と言われております。



②破壊痕跡

日本軍は米軍に利用せないように、自ら飛行場や橋などを破壊しました。現在では、天願橋跡（うるま市）や、俺首橋跡（金武町）にその痕跡が見られます。

●天願橋跡（うるま市）



●俺首橋跡（金武町）



(12) 収容所（確認されている道路…単体 1ヶ所）

米軍は、鹿児島方面に上陸した 1945 年 3 月 26 日に、南西諸島における日本政府の全施政権を停止し米軍政府の管理下におくことを宣言しました（ニミツツ布告）。それにより、沖縄本島の上陸戦を進めながら、各地に収容所も設置していくことになりました。その内、現在の宜野座村域では 4 月 5 日から収容所が造られ、様々な施設が見られ非常に大規模なものでした。宜野座村では、村内にあった収容所の共同墓地の埋葬者について遺骨収集を行い、その記録を村指定文化財としています。

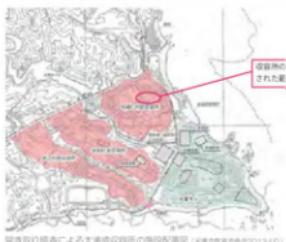
現在、明確な収容所跡として確認されているのは、名護市の大浦崎収容所跡のみです。



宜野座村内の収容所跡地資料（沖縄州1967.6.6）

●大浦崎収容所跡

米軍基地キャンプシュワップ内において、名護市教育委員会の分布調査で、大浦崎収容所跡とされる範囲で、石積みで区画された平坦地などが確認されています。



開き取り調査による大浦崎収容所の施設配置図（名護市教育委員会2013.6.6）



大浦崎収容所の様子（沖縄州1967.6.6）



大浦崎収容所跡地分布図（名護市教育委員会2013.6.6）

戦争遺跡の発掘調査

沖縄県では、1985(昭和60)年の西原町教育委員会による西原村役場壕の調査を皮切りに、2013(平成25)年度までに31件の戦争遺跡の発掘調査が行われてきました。これらの多くは、開発の事前に行われる調査で、調査が行われないまま破壊されてしまった遺跡も多くあったものと思われます。戦争遺跡を含め、文化財保護法ではその土地の所有者など関係者の協力をもとに、発掘調査を行うこととなります。

教育委員会実施・文化財保護法に基づく発掘調査等開発対応一覧

No	遺跡名	所在地	調査年度	調査種別	調査主体	戦争遺跡
1	西原村役場壕	西原町	昭和60年度	確認調査	西原町教委	○
2	森川陣地壕	西原町	昭和60年度	確認調査	西原町教委	○
3	沖縄陸軍病院南風原壕群	南風原町	平成6～17年度	確認調査	南風原町教委	○
4	津嘉山クロークボーン跡(陣地・埋葬人骨)	南風原町	平成12年度	緊急調査	南風原町教委	
5	ワイトウイの構築壕(東)	糸満市	平成13年度	緊急調査	糸満市教委	○
6	佐敷村役場壕	南城市(旧佐敷町)	平成14・15年度	確認調査	佐敷町教委	○
7	前田・経塚近世墓群の壕	浦添市	平成14～17年度	緊急・確認調査	浦添市教委	
8	稲マタ原近世墓の陣地壕群	浦添市	平成16年度	緊急調査	浦添市教委	
9	宇地泊西原丘陵古墓群のトーチカ	宜野湾市	平成16～20年度	緊急・確認調査	宜野湾市教委	
10	掛保久防空壕	西原町	平成17年度	緊急調査	西原町教委・県防災	○
11	第32軍司令部津嘉山壕群	南風原町	平成17・18年度	緊急調査	南風原町教委	○
12	津嘉山北地区旧日本軍壕跡	南風原町	平成18・21年度	緊急調査	南風原町教委	○
13	金武の震洋隊秘匿壕	金武町	平成19年度	緊急調査	金武町教委	○
14	大嶼村跡(海軍小禄飛行場跡)	那覇市	平成19～22年度	緊急・確認調査	那覇市教委	
15	兼箇段陣地壕群	うるま市	平成20年度	緊急調査	うるま市教委	○
16	首里久場川壕群	那覇市	平成21年度	緊急調査	那覇市教委	○
17	仲志原壕	南城市	平成21年度	緊急調査	南城市教委	○
18	福山の避難壕	宜野座村	平成21年度	緊急調査	宜野座村教委	○
19	沖縄陸軍病院伊原第一外科壕	糸満市	平成21・25年度	学術調査	琉球大学	○
20	字宇栄原の壕	那覇市	平成22年度	工事立会	那覇市教委	○
21	赤嶺配水池の壕群	那覇市	平成22・23年度	工事立会	那覇市教委	○
22	末吉の山陣地	那覇市	平成23年度	工事立会	那覇市教委	○
23	大浜の特攻艇秘匿壕群	宮古島市	平成23年度	工事立会	宮古島市教委	○
24	長南避難壕群	宮古島市	平成24年度	緊急調査	宮古島市教委	○
25	楚辺1丁目の壕	那覇市	平成24年度	確認調査	那覇市教委	○
26	川田の銃眼(銃座)	うるま市	平成24・25年度	緊急調査	うるま市教委	○
27	旭ヶ丘公園の陣地壕	那覇市	平成25年度	工事立会	那覇市教委	○
28	ウローカの砲台跡	南城市	平成25年度	確認調査	南城市教委	○
29	名嘉地の住民避難壕	豊見城市	平成25年度	緊急調査	豊見城市教委	○
30	加治道の避難壕	宮古島市	平成25年度	緊急調査	宮古島市教委	○
31	西更竹の避難壕	宮古島市	平成25年度	緊急調査	宮古島市教委	○

戦争遺跡の文化財指定

戦争遺跡の文化財指定は、1990（平成2）年の南風原町の沖縄陸軍病院南風原壕群が全国的に初めてのものとされます。沖縄県では、それ以前に指定されたものでも戦争遺跡と考えられるものを含むと、17件の市町村指定文化財と、1件の国登録記念物があります。現時点では、県による文化財指定はありません。今後、今回の調査及び報告書をもとに、戦争遺跡の文化財指定を含めた保存が進んでいくことが望まれます。

沖縄県内戦争遺跡指定文化財一覧

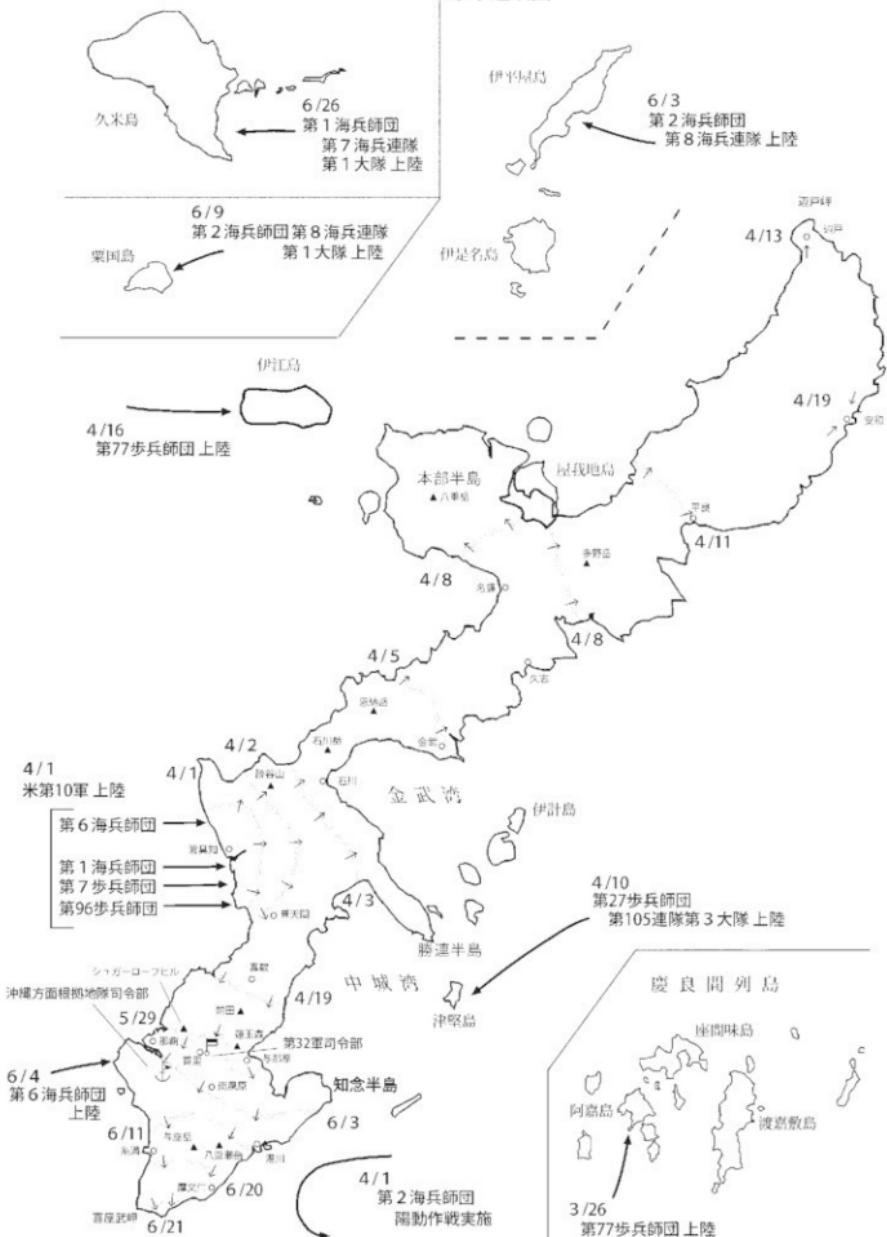
No	指定年月日	種別	指定名称	所在地
1	昭和52年12月14日	伊江村史跡	公益質屋跡	伊江村字東江上75
2	昭和61年9月25日	石垣市史跡	元海底電線陸揚室（電信屋）	石垣市字崎枝574-1
3	平成2年6月27日	南風原町史跡	南風原陸軍病院壕<2007年に「沖縄陸軍病院南風原壕」に改称>	南風原町字喜屋武地内
4	平成9年2月5日	沖縄市史跡	奉安殿（戦争遺跡）	沖縄市知花
5	平成9年2月5日	沖縄市史跡	忠魂碑（戦争遺跡）	沖縄市知花
6	平成16年3月3日	うるま市史跡	新川・クボウグスク周辺の陣地壕群	うるま市勝連津堅
7	平成16年4月15日	宮古島市史跡	海軍特攻艇格納秘匿壕	宮古島市平良字狩俣2569
8	平成17年3月1日	渡嘉敷村史跡	旧日本軍特攻艇秘匿壕	渡嘉敷村字阿波連渡嘉志久原873
9	平成17年11月30日	渡嘉敷村史跡	集団自決跡地	渡嘉敷村字渡嘉敷2760-1
10	平成20年2月7日	読谷村史跡	チビチリガマ	読谷村字波平大桑江原1135-2、1136-2
11	平成20年11月4日	石垣市歴史資料	旧登野城尋常高等小学校の奉安殿	石垣市字登野城村内290（登野城小学校内）
12	平成21年1月22日	読谷村史跡	掩体壕	読谷村字座喜味2943-1
13	平成21年1月22日	読谷村史跡	忠魂碑	読谷村字座喜味2976-1の一部2943-1の一部
14	平成21年3月30日	石垣市史跡	名藏白水の戦争遺跡群	石垣市字名藏シテ原1355-83
15	平成21年11月20日	本部町史跡（戦争遺跡）	本部監視哨跡	本部町字谷茶205
16	平成21年11月20日	本部町歴史資料	旧謝花尋常高等小学校跡 奉安殿	本部町謝花1番地
17	平成26年3月26日	中城村史跡	161.8高地陣地	中城村字北上原195番地
18	平成27年1月26日	国登録記念物（遺跡関係）	平敷屋製糖工場跡	うるま市勝連平敷屋
※1	平成13年10月9日	宜野座村歴史資料	沖縄戦闘宜野座村資料	宜野座字宜野座246

※1 文献資料の有形文化財として指定

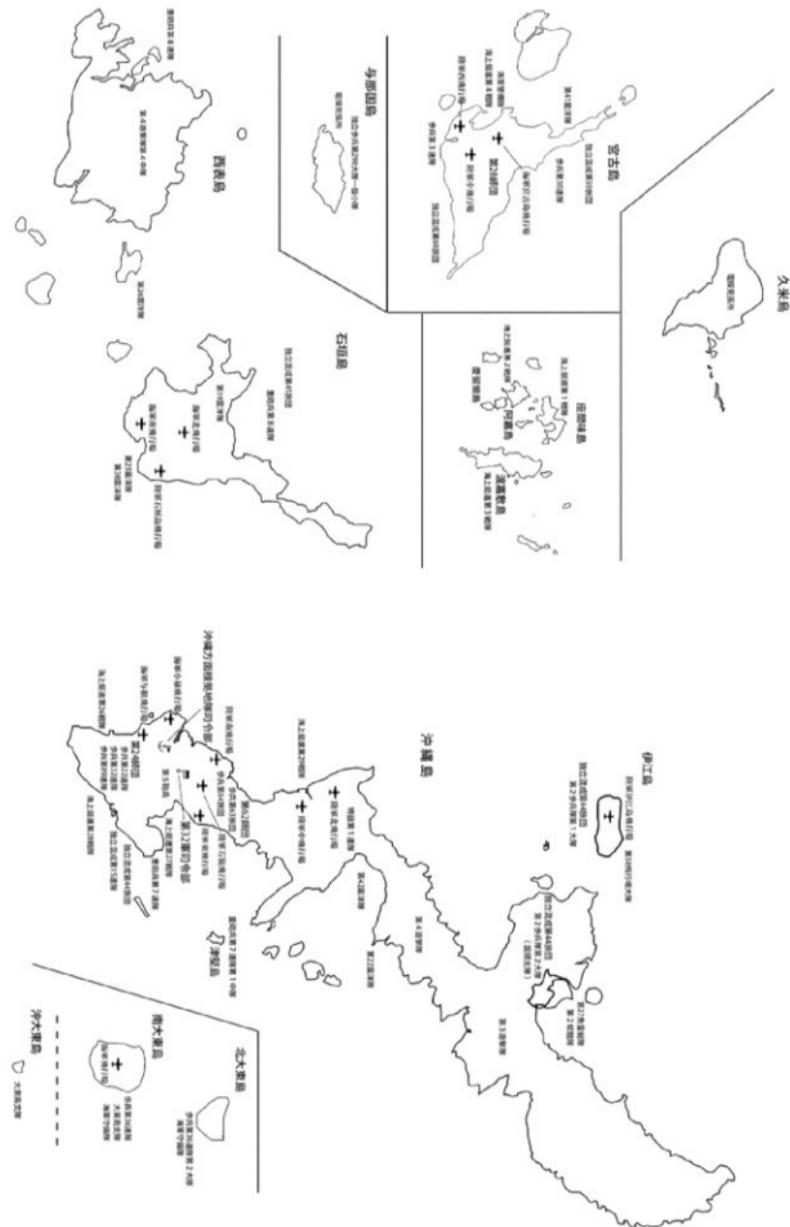
沖縄県の戦争遺跡に関する年表

- 1879年 明治政府は軍隊と警察官を派遣して琉球藩を廢止し沖縄県設置（琉球処分）
- 1896年 首里城に配備されていた熊本鎮台分遣隊が撤退
中城湾海軍需品支庫が建設
鹿児島－沖縄－台湾間の電信建設の為海底線陸揚室・通信所が建設
- 1898年 沖縄県に徵兵令施行
- 1904年 海上監視のための海軍望楼が建設
大正期から昭和初期にかけて、忠魂碑・奉安殿などの記念碑が多く造られる
- 1933年 小禄（那覇市）、平喜名（石垣市）に海軍飛行場が建設
- 1941年 中城湾と船浮（西表島）に臨時要塞が建設
陸軍のマレー半島奇襲、陸軍による真珠湾攻撃（12月8日 太平洋戦争開始）
このころ、沖縄県警察が管轄する防空監視哨が県内に 11カ所建設
- 1942年 日本軍はビルマ・香港・東インド・フィリピンなどを占領（1～5月）
ミッドウェー海戦、ソロモン諸島で敗戦（7月～）
- 1943年 陸軍による沖縄北（読谷）飛行場、伊江島飛行場などが建設開始（3月～）
「学徒戦時勤員体制確立要綱」の閣議決定（6月）
大本営による絶対国防圈（※）の設定し、御前会議で承認
※千島・小笠原・マリアナ・カロリン・西ニューギニア・ビルマを防衛ラインとする
- 1944年 米軍による日本軍の太平洋の拠点であるトラック諸島を急襲（2月）
南西諸島防衛のため第32軍を創設（3月22日）
マリアナ諸島が米軍による攻撃を受け、サイパンが陥落（6～8月）
第9・24・62師団を沖縄本島、宮古に第28師団など第32軍増強（7月～）
フィリピンのレイテ沖、ベリリュー島などで敗戦（10～12月）
南西諸島全域で大空襲（10・10空襲）
第9師団が台湾へ抽出され（12月）、以後第32軍の部隊配備が大きく変更
- 1945年 米軍はルソン島上陸（1月） 硫黄島の敗戦（2～3月）
米軍による南西諸島への空襲・艦砲が始まり、慶良間諸島へ上陸（3月26日）
以後、米軍政府は南西諸島を管理下におくこと宣言（ニミツ布告）
米軍の沖縄本島上陸（4月1日） 米軍の津堅島上陸（4月10日）
米軍の本部半島制圧（4月16日） 伊江島の日本軍壊滅（4月21日）
前田高地（浦添市）一帯で日本軍は総攻撃を行い失敗（5月3～5日）
第32軍司令部は本島南部の摩文仁（糸満市）に撤退（5月27～29日）
海軍沖縄方面根拠地隊が小禄一帯で壊滅（6月13日）
第32軍牛島司令官・長参謀長が自決し、組織的戦闘終了（6月23日）
沖縄県立石川高等学校の開校（7月30日） 米軍の本島北部の掃討戦終了（8月4日）
米軍の広島・長崎への原爆投下（8月6・9日）
日本政府はポツダム宣言を受諾し、天皇はラジオ放送で戦争終結を発表（8月14・15日）
日本政府は米艦ミズーリ号で降伏文書に調印（9月2日）
第28師団納見司令官を南西諸島の日本軍を代表とし、米軍との降伏文書調印（9月7日）

米軍進攻図



第32軍主要部隊配置図（1945年3月末の段階）



(戦争遺跡分布図①)

国頭村・大宜味村・東村・伊江村

国頭村①



国頭村②



大宜味村

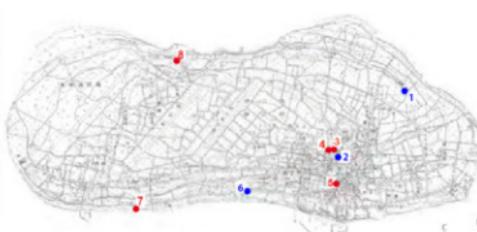


東村



伊江村

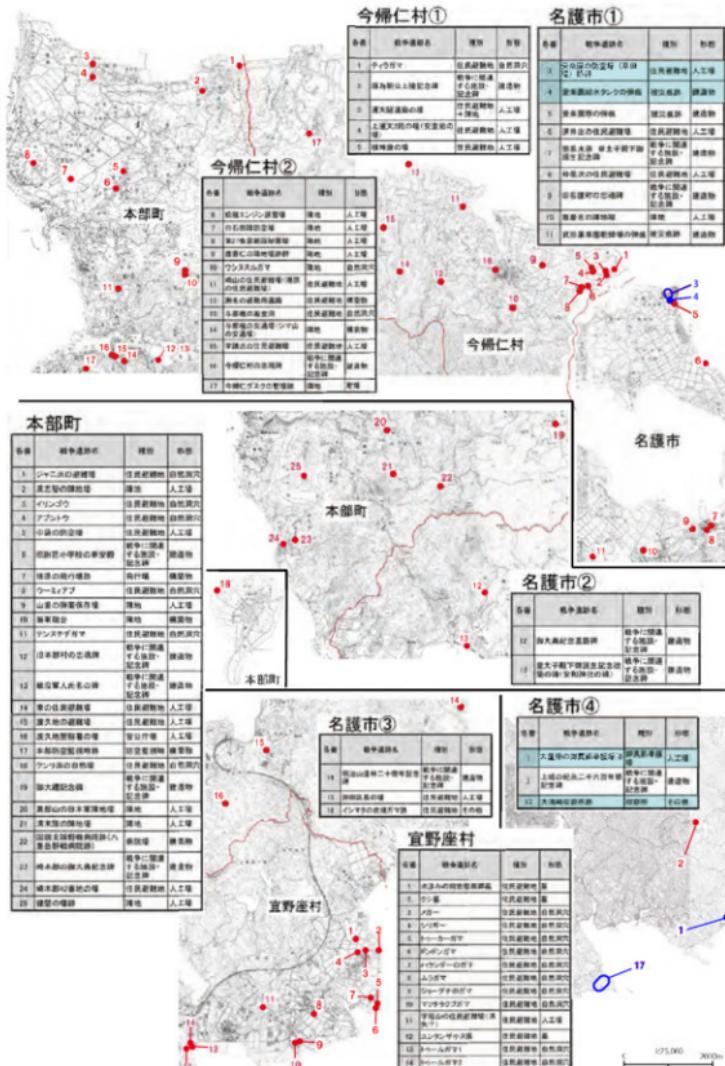
番号	戦争遺跡名	種別	特徴
1	アリーナ跡	住民避難地	防空壕
2	公勵萬葉跡の立通塹	住民避難地	機雷敷設
3	シカバウム立通塹(山洋)(立通塹跡1)	塹地	機雷敷設
4	シカバウム立通塹	塹地	人工場
5	シカバウム立通塹(山洋)(立通塹跡2)	塹地	人工場
6	シカバウム立通塹(山洋)(立通塹跡3)	塹地	人工場
7	シカバウム立通塹(山洋)(立通塹跡4)	塹地	人工場



1:75,000 200m

戦争遺跡分布図(2)

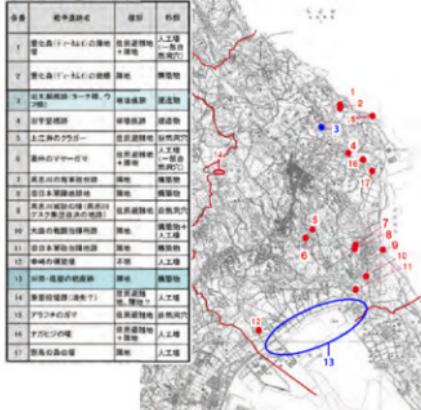
今帰仁村・名護市・本部町・宜野庄村



戦争遺跡分布図(3)

うるま市・金武町・恩納村

うるま市①(旧具志川市)



うるま市②(旧与那城町1)



うるま市④(旧勝連町1)

名番	戦争遺跡名	種別	位置
1	方に島ウカシウカマ	佐世保陸軍	自然河川
2	ヒバニチヤマ	佐世保陸軍	自然河川
3	日本平の陣地	佐世保陸軍	海岸

恩納村①

名番	戦争遺跡名	種別	位置
1	恩納真的の浜陣地	佐世保陸軍	人工堤防
2	ウカニマリ	佐世保陸軍	海岸
3	朝日御嶽第一の陣地	陸軍	人工堤防

名番	戦争遺跡名	種別	位置
4	朝日御嶽第一の陣地	佐世保陸軍	海岸
5	ウカニマリ	佐世保陸軍	海岸
6	朝日御嶽	陸軍	海岸
7	朝日御嶽の正門通路	佐世保陸軍	海岸
8	朝日御嶽	陸軍	海岸
9	朝日御嶽	佐世保陸軍	海岸
10	朝日御嶽	佐世保陸軍	海岸
11	朝日御嶽	陸軍	海岸
12	朝日御嶽の海岸	佐世保陸軍	海岸
13	朝日御嶽の海岸	佐世保陸軍	海岸
14	朝日御嶽の海岸	佐世保陸軍	海岸
15	朝日御嶽の海岸	佐世保陸軍	海岸
16	朝日御嶽の海岸	佐世保陸軍	海岸
17	朝日御嶽の海岸	佐世保陸軍	海岸
18	朝日御嶽の海岸	佐世保陸軍	海岸
19	朝日御嶽の海岸	佐世保陸軍	海岸
20	朝日御嶽の海岸	佐世保陸軍	海岸
21	朝日御嶽の海岸	佐世保陸軍	海岸

金武町②

名番	戦争遺跡名	種別	位置
1	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
2	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
3	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
4	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
5	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
6	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
7	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
8	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
9	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
10	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
11	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
12	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
13	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
14	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
15	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
16	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
17	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
18	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
19	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
20	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
21	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
22	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
23	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
24	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
25	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
26	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
27	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸

恩納村③

名番	戦争遺跡名	種別	位置
22	ワタリガラ	佐世保陸軍	自然河川
23	喜也森(シヤスカイ)の陣地(清水)	平地	人工堤防
24	喜也森(シヤスカイ)の陣地(清水)	佐世保陸軍	自然河川
25	喜也森(シヤスカイ)の陣地(清水)	佐世保陸軍	海岸
26	喜也森(シヤスカイ)の陣地(清水)	陸軍	海岸
27	喜也森(シヤスカイ)の陣地(清水)	陸軍	海岸

恩納村②

名番	戦争遺跡名	種別	位置
3	牛之瀬の二ヶ所	陸軍	海岸
4	牛之瀬の二ヶ所	陸軍	人工堤防
5	東洋の橋	陸軍	人工堤防
6	虎之瀬(ハリヌシ)の陣地	佐世保陸軍	海岸
7	虎之瀬(ハリヌシ)の陣地	陸軍	海岸
8	ウカニマリの陣地	佐世保陸軍	海岸
9	ウカニマリの陣地	陸軍	海岸
10	北原の陣地	佐世保陸軍	海岸
11	北原の陣地	陸軍	海岸
12	北原のタツノノ瀬	陸軍	海岸
13	北原瀬(カツノノ瀬)の陣地	佐世保陸軍	海岸
14	北原瀬(カツノノ瀬)の陣地	佐世保陸軍	海岸
15	北原瀬(カツノノ瀬)の陣地	佐世保陸軍	海岸
16	北原瀬(カツノノ瀬)の陣地	佐世保陸軍	海岸
17	アツコナ	佐世保陸軍	海岸
18	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
19	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
20	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸
21	アツコナの陣地	佐世保陸軍	海岸

金武町③

名番	戦争遺跡名	種別	位置
14	朝日御嶽の陣地	佐世保陸軍	人工堤防
15	朝日御嶽の陣地	佐世保陸軍	人工堤防

1/50,000 2000m

戦争遺跡分布図(4)

読谷村・嘉手納町・沖縄市・うるま市

読谷村①

名番	地名/遺跡名	種別	形態
1	飛行場の堤	住民避難場	自然河川
2	平成農業の記念碑	住民避難場	自然河川
3	復興総合運動公園	住民避難場	人工河川
4	復興総合運動公園	住民避難場	自然河川
5	復興総合運動公園	住民避難場	人工河川

読谷村②

読谷村②

名番	地名/遺跡名	種別	形態
1	御嶽山の空襲爆	自然河川	自然河川
2	日高川の空襲爆	自然河川	自然河川
3	サボリーフ	日高川の空襲爆	自然河川
4	シルカガマ	日高川の空襲爆	自然河川
5	御嶽の空襲爆アットガマ	日高川の空襲爆	自然河川
6	御嶽の空襲爆	日高川の空襲爆	自然河川
7	豊崎海岸の空襲爆	海岸	海岸
8	御嶽川の空襲爆避難場	住民避難場	人工河川
9	御嶽の空襲爆避難場	住民避難場	人工河川
10	御嶽の空襲爆避難場	住民避難場	人工河川
11	御嶽の空襲爆避難場	住民避難場	人工河川
12	御嶽・飛行場避難場の空襲爆	住民避難場	人工河川

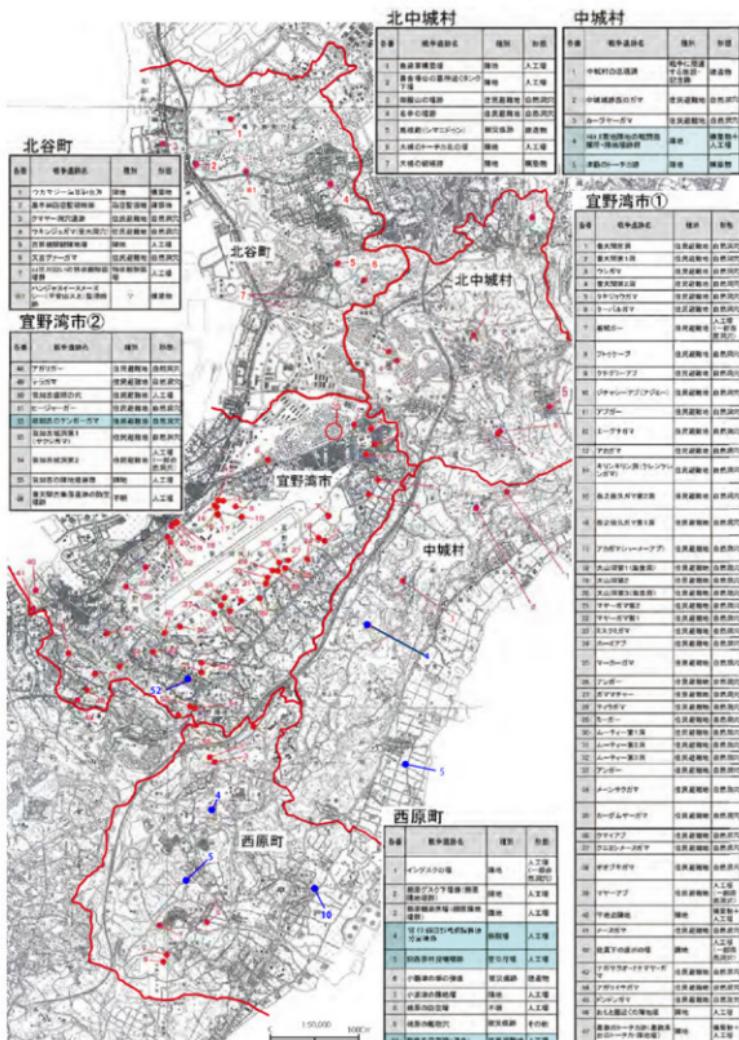


うるま市⑤(旧勝連町2)

名番	地名/遺跡名	種別	形態
4	勝連橋の堤	住民避難場	人工河川
5	伊勢志士空襲避難場	住民避難場	人工河川
6	北島(イハシ)の堤	住民避難場	人工河川
7	ジージー橋	住民避難場	自然河川
8	中里橋	住民避難場	自然河川
9	伊勢志士空襲避難場	住民避難場	人工河川
10	伊勢志士空襲避難場	住民避難場	人工河川
11	伊勢志士空襲避難場	住民避難場	人工河川
12	伊勢志士空襲避難場	住民避難場	人工河川

戦争遺跡分布図(5)

北谷町・宜野湾市・中城村・北中城村・西原町



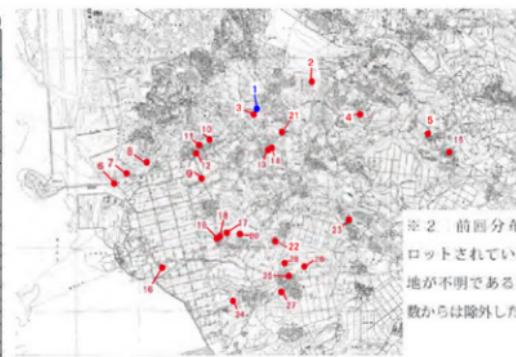
*1 前回分布調査でプロットされているが、明確な資料が探すことが出来ず、嘉手納防空監視哨があった場所も平安山又上とされているので、同一の可能性もあるので記述数からは除外した。

(戦争遺跡分布図(7))

豊見城市・与那原町・南城市・南風原町

豊見城市(旧豊見城村)

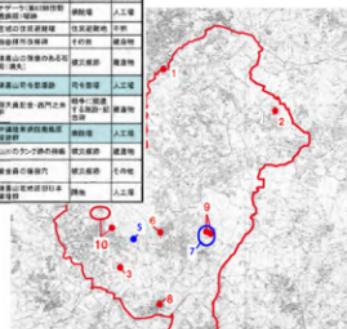
名番	跡名(遺跡名)	種別	位置
1	豊見城城跡	人工遺跡	人工遺跡
2	第4回復元(復元)城跡	人工遺跡	人工遺跡
3	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
4	マダラ	人工遺跡	人工遺跡
5	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
6	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
7	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
8	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
9	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
10	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
11	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
12	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
13	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
14	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
15	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
16	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
17	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
18	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
19	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
20	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
21	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
22	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
23	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
24	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
25	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
26	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
27	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
28	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
29	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
30	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
31	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
32	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡



* 2 前回分布調査でプロットされているが、所在地が不明であるため、遺跡数からは除外した。

南風原町

名番	跡名(遺跡名)	種別	位置
1	マダラ・城跡(城跡)	人工遺跡	人工遺跡
2	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
3	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
4	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
5	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
6	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
7	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
8	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
9	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
10	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
11	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
12	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡



与那原町

名番	跡名(遺跡名)	種別	位置
1	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
2	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
3	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
4	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡

与那原町



南城市①(旧佐敷町)

名番	跡名(遺跡名)	種別	位置
1	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
2	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
3	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
4	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡



南城市②(旧大里村)

名番	跡名(遺跡名)	種別	位置
1	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
2	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
3	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
4	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡
5	火薬庫の跡	人工遺跡	人工遺跡

1:50,000 100km²

(戦争遺跡分布図(8))

南城市・八重瀬町

南城市③(旧玉城村1) 南城市④(旧玉城村2)

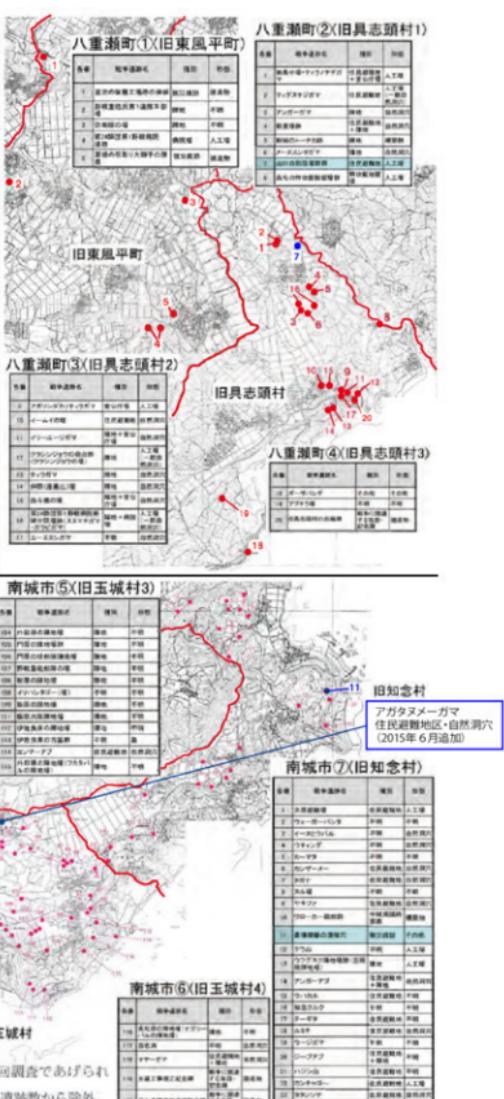
番号	地名	種別	状況
1	ワガシーラー	施設	現存
2	モルタル弾薬庫	施設	現存
3	モルタル弾薬庫	施設	現存
4	モルタル弾薬庫(北側)	施設	現存
5	モルタル弾薬庫	施設	現存
6	モルタル弾薬庫	施設	現存
7	モルタル弾薬庫	施設	現存
8	モルタル弾薬庫	施設	現存
9	モルタル弾薬庫	施設	現存
10	モルタル弾薬庫	施設	現存
11	モルタル弾薬庫	施設	現存
12	モルタル弾薬庫	施設	現存
13	モルタル弾薬庫	施設	現存
14	モルタル弾薬庫	施設	現存
15	モルタル弾薬庫	施設	現存
16	モルタル弾薬庫	施設	現存
17	モルタル弾薬庫	施設	現存
18	モルタル弾薬庫	施設	現存
19	モルタル弾薬庫	施設	現存
20	モルタル弾薬庫	施設	現存
21	モルタル弾薬庫	施設	現存
22	モルタル弾薬庫	施設	現存
23	モルタル弾薬庫	施設	現存
24	モルタル弾薬庫	施設	現存
25	モルタル弾薬庫	施設	現存
26	モルタル弾薬庫	施設	現存
27	モルタル弾薬庫	施設	現存
28	モルタル弾薬庫	施設	現存
29	モルタル弾薬庫	施設	現存
30	モルタル弾薬庫	施設	現存
31	モルタル弾薬庫	施設	現存
32	モルタル弾薬庫	施設	現存
33	モルタル弾薬庫	施設	現存
34	モルタル弾薬庫	施設	現存
35	モルタル弾薬庫	施設	現存
36	モルタル弾薬庫	施設	現存
37	モルタル弾薬庫	施設	現存
38	モルタル弾薬庫	施設	現存
39	モルタル弾薬庫	施設	現存
40	モルタル弾薬庫	施設	現存
41	モルタル弾薬庫	施設	現存
42	モルタル弾薬庫	施設	現存
43	モルタル弾薬庫	施設	現存
44	モルタル弾薬庫	施設	現存
45	モルタル弾薬庫	施設	現存
46	モルタル弾薬庫	施設	現存
47	モルタル弾薬庫	施設	現存
48	モルタル弾薬庫	施設	現存
49	モルタル弾薬庫	施設	現存
50	モルタル弾薬庫	施設	現存
51	モルタル弾薬庫	施設	現存
52	モルタル弾薬庫	施設	現存
53	モルタル弾薬庫	施設	現存
54	モルタル弾薬庫	施設	現存
55	モルタル弾薬庫	施設	現存
56	モルタル弾薬庫	施設	現存
57	モルタル弾薬庫	施設	現存
58	モルタル弾薬庫	施設	現存
59	モルタル弾薬庫	施設	現存
60	モルタル弾薬庫	施設	現存
61	モルタル弾薬庫	施設	現存
62	モルタル弾薬庫	施設	現存
63	モルタル弾薬庫	施設	現存
64	モルタル弾薬庫	施設	現存
65	モルタル弾薬庫	施設	現存

南城市⑤(旧玉城村3)

番号	地名	種別	状況
1	モルタル弾薬庫	施設	現存
2	モルタル弾薬庫	施設	現存
3	モルタル弾薬庫	施設	現存
4	モルタル弾薬庫	施設	現存
5	モルタル弾薬庫	施設	現存
6	モルタル弾薬庫	施設	現存
7	モルタル弾薬庫	施設	現存
8	モルタル弾薬庫	施設	現存
9	モルタル弾薬庫	施設	現存
10	モルタル弾薬庫	施設	現存
11	モルタル弾薬庫	施設	現存
12	モルタル弾薬庫	施設	現存
13	モルタル弾薬庫	施設	現存
14	モルタル弾薬庫	施設	現存
15	モルタル弾薬庫	施設	現存
16	モルタル弾薬庫	施設	現存
17	モルタル弾薬庫	施設	現存
18	モルタル弾薬庫	施設	現存
19	モルタル弾薬庫	施設	現存
20	モルタル弾薬庫	施設	現存
21	モルタル弾薬庫	施設	現存
22	モルタル弾薬庫	施設	現存
23	モルタル弾薬庫	施設	現存
24	モルタル弾薬庫	施設	現存
25	モルタル弾薬庫	施設	現存
26	モルタル弾薬庫	施設	現存
27	モルタル弾薬庫	施設	現存
28	モルタル弾薬庫	施設	現存
29	モルタル弾薬庫	施設	現存
30	モルタル弾薬庫	施設	現存
31	モルタル弾薬庫	施設	現存
32	モルタル弾薬庫	施設	現存
33	モルタル弾薬庫	施設	現存
34	モルタル弾薬庫	施設	現存
35	モルタル弾薬庫	施設	現存
36	モルタル弾薬庫	施設	現存
37	モルタル弾薬庫	施設	現存
38	モルタル弾薬庫	施設	現存
39	モルタル弾薬庫	施設	現存
40	モルタル弾薬庫	施設	現存
41	モルタル弾薬庫	施設	現存
42	モルタル弾薬庫	施設	現存
43	モルタル弾薬庫	施設	現存
44	モルタル弾薬庫	施設	現存
45	モルタル弾薬庫	施設	現存
46	モルタル弾薬庫	施設	現存
47	モルタル弾薬庫	施設	現存
48	モルタル弾薬庫	施設	現存
49	モルタル弾薬庫	施設	現存
50	モルタル弾薬庫	施設	現存
51	モルタル弾薬庫	施設	現存
52	モルタル弾薬庫	施設	現存
53	モルタル弾薬庫	施設	現存
54	モルタル弾薬庫	施設	現存
55	モルタル弾薬庫	施設	現存
56	モルタル弾薬庫	施設	現存
57	モルタル弾薬庫	施設	現存
58	モルタル弾薬庫	施設	現存
59	モルタル弾薬庫	施設	現存
60	モルタル弾薬庫	施設	現存
61	モルタル弾薬庫	施設	現存
62	モルタル弾薬庫	施設	現存
63	モルタル弾薬庫	施設	現存
64	モルタル弾薬庫	施設	現存
65	モルタル弾薬庫	施設	現存

26, 46, 59, 61, 69は前回調査であげられ
ているが所在地が明確でなく、遺跡数から除外。

C
100m

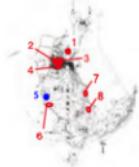


戦争遺跡分布図(10)

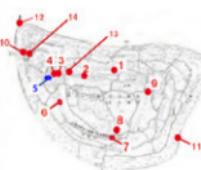
北大東村・南大東村・渡名喜村・渡嘉敷村・座間味村

波名喜村

番号	掲示看板の内容	種別	状況
1	福井県の生産者登録	生産者登録地	人工地
2	ヒンカンの導線	巡回路地	通常地
3	定期工作地	定期点検地	通常地
4	近レント付賃農地の看板	近隣耕地面積地	通常地
5	ヘーフチガ谷	生産避難地	自然、河川地
6	エフロの世界遺産登録地	世界遺産登録地	人工地
7	アグリツーリズム世界遺産登録地	世界遺産登録地	自然、河川地
8	アグリツーリズムの世界遺産登録地	世界遺産登録地	自然、河川地

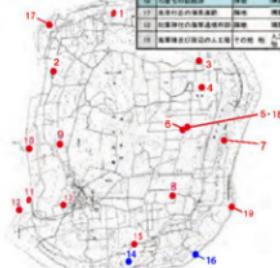


北大東村



南大東村①

名前	成年期
1	アラウンド・ザ・ワールド・ソルジャー
2	魔術師
3	小人(魔術師の助役)
4	山下問題解決者
5	宇宙飛行士の老練者
6	紅魔神院紹介員
7	魔術の魔術師
8	古代魔術士の少佐

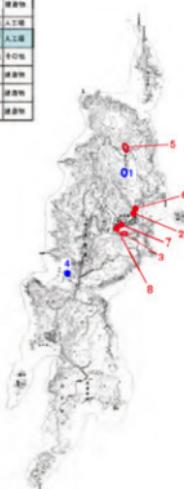


南大東村②

合計	現地調査用	種別	動向
1	大賀鉱社(日本鋼管本部)	現用	人工作業
12	金剛山銅の跡地(約1万ha)	未活用地	人工作業 一部自然化
17	足立山(約1千ha)	現用	機械化
22	佐野の鉱脈	現用	機械化
26	足立山銅の跡地(約1万ha)	現用	自然回復
28	鳴子温泉の跡地(約1千ha)	現用	機械化
34	鳴子温泉の跡地(約1千ha)	現用	機械化
35	日立川(約1ha)付帯地	現用	人工作業
36	阿武隈内陸鉄道	現用	機械化
37	阿武隈川の跡地(約1千ha)	現用	機械化
38	日立川付近の跡地(約1千ha)	現用	機械化
39	鳴子温泉の跡地(約1千ha)	現用	機械化

波嘉數村

名前	場所	性別	年齢
1. 田村の植物園園長	植物園	人	上級
2. 岩瀬銀行の支店長	支店	人	中級
3. 本部課長の女性課長	本部	女	上級
4. 運送会社の女性運転手	運送会社	女	上級
5. 李の社員の新規顧客	社員	李	中級
6. 新規顧客の新規顧客	新規顧客	新規顧客	新規顧客
7. 楊の新規顧客の新規顧客	新規顧客	楊	新規顧客
8. 本部課長の女性課長	本部	女	上級



庄閒味村

戦争遺跡分布図(11)

伊平屋村・伊是名村・粟国村・久米島町・宮古島市・多良間村

伊平屋村

番号	地名	遺跡	施設
1	北やかの御の御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
2	御所神社の通路	御廻遊跡	人工道
3	高浜の御廻遊跡	御廻遊跡	廻遊跡



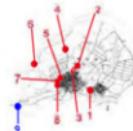
伊是名村

番号	地名	遺跡	施設
1	伊是名御内石垣跡	石垣跡	石垣跡
2	伊是名御内石垣跡	石垣跡	石垣跡



粟国村

番号	地名	遺跡	施設
1	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
2	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
3	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
4	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
5	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
6	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
7	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
8	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
9	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
10	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
11	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
12	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
13	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
14	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
15	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
16	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
17	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
18	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
19	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
20	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡



久米島町

番号	地名	遺跡	施設
1	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
2	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
3	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
4	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
5	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
6	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
7	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
8	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
9	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
10	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
11	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
12	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
13	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
14	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
15	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
16	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
17	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
18	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
19	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡
20	御廻遊跡	廻遊跡	廻遊跡



多良間村

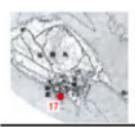
番号	地名	遺跡	施設
1	シマーラス	廻遊跡	廻遊跡
2	シマーラス	廻遊跡	廻遊跡
3	シマーラス	廻遊跡	廻遊跡



1:400,000 300m

戦争遺跡分布図(12)

宮古島市

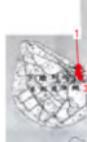


宮古島市③(旧平良市2)



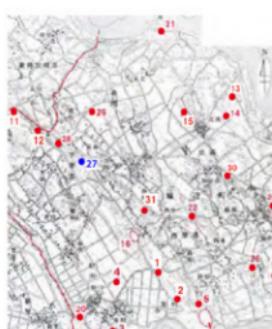
宮古島市④(旧上野村)

番号	戦争遺跡名	種別	位置(位置)
1	日本式の防空壕	掩体	掩体
2	日本式の防空壕	掩体	掩体
3	日本式の防空壕	掩体	掩体
4	日本式の防空壕	掩体	掩体
5	日本式の防空壕	掩体	掩体
6	日本式の防空壕	掩体	掩体
7	日本式の防空壕	掩体	掩体
8	日本式の防空壕	掩体	掩体
9	日本式の防空壕	掩体	掩体
10	日本式の防空壕	掩体	掩体
11	日本式の防空壕	掩体	掩体
12	日本式の防空壕	掩体	掩体
13	日本式の防空壕	掩体	掩体
14	日本式の防空壕	掩体	掩体



番号	戦争遺跡名	種別	位置
1	チャップラ	防空避難場	自然凹地
2	大正時代の防空壕	掩体	人工堆
3	軍事施設のトロッピング遮蔽	掩体	トロッピング遮蔽
4	地下防空壕の通路	通路	地下防空壕
5	トロッピング遮蔽	掩体	人工堆

Scale: 1:25,000 (250m)



宮古島市⑤(旧下地町)

番号	戦争遺跡名	種別	位置
1	チャップラ	防空避難場	自然凹地
2	トロッピング遮蔽	防空避難場	自然凹地
3	トロッピング遮蔽	防空避難場	自然凹地
4	カーラー	防空避難場	自然凹地
5	アブラー	防空避難場	自然凹地
6	軍事施設の防空避難場	掩体	人工堆
7	チャップラ	防空避難場	自然凹地
8	トロッピング遮蔽	防空避難場	自然凹地
9	カーラー	防空避難場	自然凹地
10	チャップラ	防空避難場	自然凹地
11	軍事施設の防空避難場	掩体	人工堆
12	ムカシーラー	防空避難場	自然凹地
13	チャップラ	防空避難場	自然凹地
14	トロッピング遮蔽	防空避難場	自然凹地
15	カーラー	防空避難場	自然凹地
16	チャップラ	防空避難場	自然凹地
17	ムカシーラー	防空避難場	自然凹地
18	トロッピング遮蔽	防空避難場	自然凹地
19	カーラー	防空避難場	自然凹地
20	チャップラ	防空避難場	自然凹地
21	ムカシーラー	防空避難場	自然凹地
22	トロッピング遮蔽	防空避難場	自然凹地
23	カーラー	防空避難場	自然凹地
24	チャップラ	防空避難場	自然凹地
25	ムカシーラー	防空避難場	自然凹地
26	トロッピング遮蔽	防空避難場	自然凹地
27	カーラー	防空避難場	自然凹地
28	チャップラ	防空避難場	自然凹地
29	ムカシーラー	防空避難場	自然凹地
30	トロッピング遮蔽	防空避難場	自然凹地
31	カーラー	防空避難場	自然凹地
32	チャップラ	防空避難場	自然凹地
33	ムカシーラー	防空避難場	自然凹地

戦争遺跡分布図(13)

石垣市

石垣市①

番号	戦争遺跡名	種別	形態
1	フルスコット爆弾投下目標 地(フルスコットの爆弾投下 目標)	飛行場	人工港
2	空母の特攻駆逐艦爆撃機 着陸場	飛行場	人工港
3	地雷敷設の場	飛行場	人工港
4	シーポート	飛行場	人工港
5	大糸の飛行場跡	飛行場	建没物
6	日高屋前山の飛行場・飛沫 飛沫	飛行場	建没物
7	伊野田千島の場	飛行場	人工港
8	古賀・那須の場	飛行場	人工港
9	毛越の南側マーナカ	飛行場	建没物
10	石垣丸の飛行場	飛行場	人工港
11	平良名飛行場跡の電波 探査施設跡	飛行場	人工港
12	宮典牧中の避難場	飛行場	人工港
13	宮典牧中の避難場	飛行場	自然洞穴
14	宮典牧中の避難場跡	飛行場	人工港
15	宮典牧中の避難場	飛行場	自然洞穴
16	宮典牧中の避難場跡	飛行場	人工港・建 造物
17	久高ナーカーの港	飛行場	人工港
18	ヘーリング港・空襲避難	飛行場	人工港
19	サンニの防空所	その他	建没物



石垣市②

番号	戦争遺跡名	種別	形態
31	野球場・いづべー入門の跡地	飛行場	人工港
32	大糸高瀬市の飛行場跡	飛行場	人工港
33	日高屋前山の飛行場・平 原	飛行場	人工港
34	カオガシの飛行場	飛行場	自然洞穴
35	宮典牧民避難場(ナーバ 村)	飛行場	自然洞穴
36	島根復興道路	飛行場	人工港
37	矢富・イランの洞窟	飛行場	自然洞穴
38	毛越の飛行場跡	飛行場	建没物
39	毛越川口の島木特別状況 施設	飛行場	建没物
40	内原屋の飛行場跡	飛行場	建没物
41	内原屋の場	飛行場	自然洞穴
42	内原屋山の山かど源と井 の井	飛行場	自然洞穴
43	内原屋山の山かど源と井 の井	飛行場	自然洞穴
44	高見山系の飛行場・飛立 所	飛行場	建没物
45	高見山系第2リバタ飛行場 跡	飛行場	建没物

石垣市③

番号	戦争遺跡名	種別	形態
46	豪山場(山)・高山森林高松 場	飛行場	不明
47	ハイスクエアライド入口 飛行場	飛行場	人工港・整備など
48	から東の(山)まき長篠き 連理・イ保神の場	飛行場	人工港
49	たうら西の(山)まき長篠き 連理・イ保神の場	飛行場	人工港
50	豊見城・鶴丸の飛行場跡	飛行場	自然洞穴
51	白星・ツバメ飛行場の場	飛行場	人工港
52	三の島の場	飛行場	人工港
53	マーブル	飛行場	自然洞穴



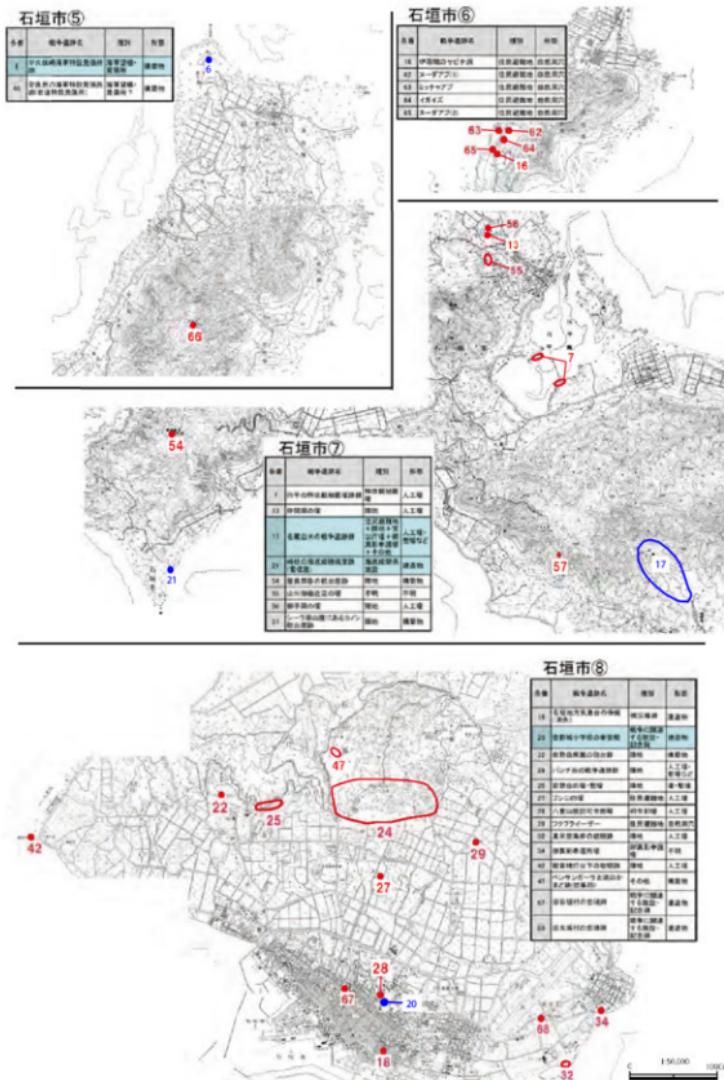
石垣市④

番号	戦争遺跡名	種別	形態
54	八重山神社	その他	建没物
55	物忌島の下平場	飛行場	人工港
56	武蔵野原の山道・平型場	飛行場	人工港
57	海軍特務要塞跡	飛行場	人工港



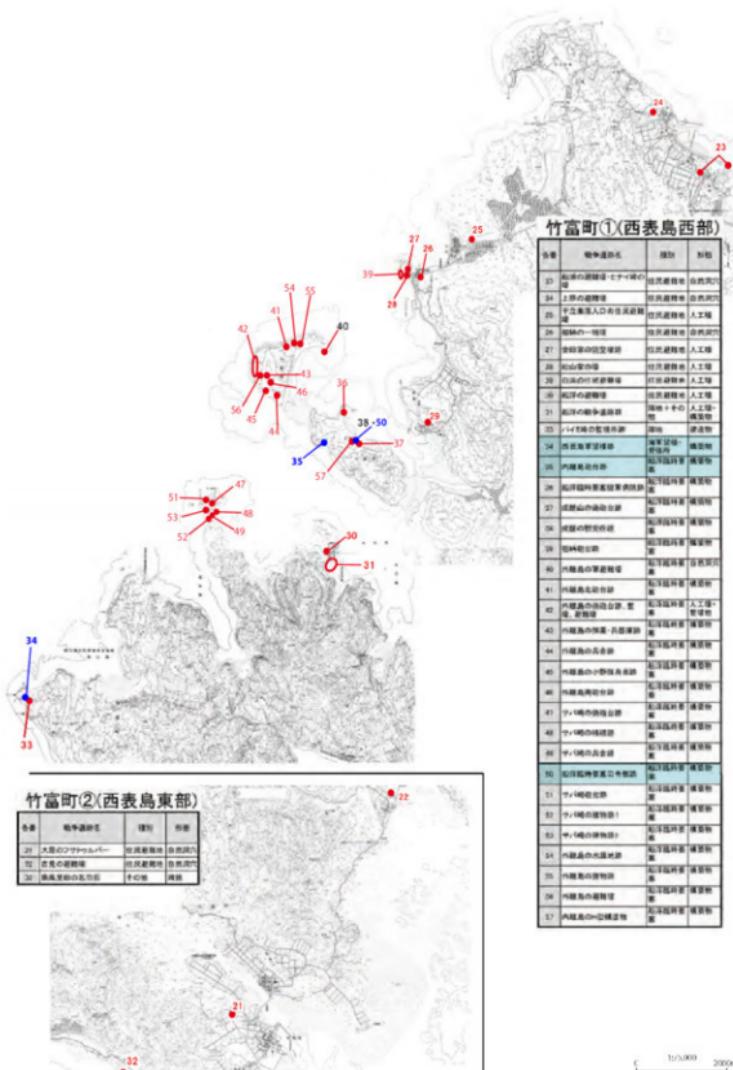
(戦争遺跡分布図(14))

石垣市



(戦争遺跡分布図(15))

竹富町

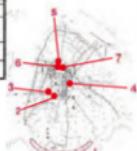


戦争遺跡分布図(16)

竹富町・与那国町

竹富町③(竹富島)

名前	戦争遺跡名	種別	状態
1.	戦争遺跡番号の記載	碑地	人工作成
2.	マーカー	平地	自然形成
3.	マーカー	平地	自然形成
4.	マーカー	平地	人工作成
5.	洋耕地の記載	碑地	自然形成
6.	洋耕地の記載	碑地	自然形成
7.	洋耕地の記載	碑地	自然形成



竹富町④(小浜島)

名前	戦争遺跡名	種別	状態
1.	マーカー	平地	自然形成
2.	マーカー	平地	自然形成
3.	マーカー	平地	自然形成
4.	マーカー	平地	自然形成



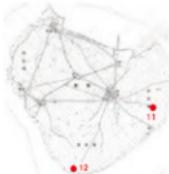
竹富町⑧(鳩間島)

名前	戦争遺跡名	種別	状態
1.	マーカー	平地	自然形成
2.	マーカー	平地	自然形成



竹富町⑤(黒島)

名前	戦争遺跡名	種別	状態
1.	洋耕地の記載	碑地	自然形成
2.	洋耕地の記載	碑地	自然形成



竹富町⑥(新城島)

名前	戦争遺跡名	種別	状態
1.	マーカー	平地	自然形成
2.	マーカー	平地	自然形成
3.	マーカー	平地	自然形成
4.	マーカー	平地	自然形成
5.	マーカー	平地	自然形成

与那国町

名前	戦争遺跡名	種別	状態
1.	洋耕地の記載	碑地	自然形成
2.	マーカー	平地	自然形成
3.	マーカー	平地	自然形成
4.	マーカー	平地	自然形成
5.	マーカー	平地	自然形成
6.	マーカー	平地	自然形成
7.	マーカー	平地	自然形成
8.	マーカー	平地	自然形成

1:5,000 2000m

竹富町⑦(波照間島)

名前	戦争遺跡名	種別	状態
1.	洋耕地の記載	碑地	自然形成
2.	マーカー	平地	自然形成



戦争遺跡分布図 凡例

- 前回分布調査の成果報告である『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査』I~VIの所収図を使用しているため、その時点での国土地理院の数値地図となっており、現在の地形や地名・施設名など異なる場合がある。
- 前回分布調査時の戦争遺跡は概ね指定掲載しているが、場所については一部修正しているものがある。なお、遺跡名は変更しているものについては、できるだけ旧名称をカッコづけで記すようにした。
- 今回の調査で把握した戦争遺跡も新たに加えている。
- 開墾等で、おそらく全壊してしまったと見られる戦争遺跡については、遺跡名の欄に「消失」と付している。
- 遺跡名については、今回調査したものについては「跡」を付しているが、全体の統一はしていない。
なお、自然洞穴を意味する「ガマ」や「アブ」については、呼称上、現時点では「跡」を付していない。
- 遺跡範囲については、広範囲に広がると確実に把握できたものは、線を括ることにより表現している。一方、ドットで示したものは、この範囲内にあるという程度の理解で、その範囲がさらに広くなる可能性は考えられる。
- 図解で取り上げた戦争遺跡は青字で示した。

※報告書を刊行した2015年3月時点では、1,076ヶ所であったが、当センター2001年刊行『戦争遺跡詳細分布調査編（1）－南部編－』で掲載したアガタヌメーガマ（南城市、旧玉城）が分布図より抜けていたことを同年6月に気付いた。そのため、これを追加すると1,077ヶ所となる。



平敷屋砲台跡（上：復元模型 下：砲台4周辺伐採後）

【平敷屋砲台跡復元模型（20分の1）】

平敷屋砲台跡でどのような大砲が配備されたのかは資料や証言などからはわかつています。砲床に特徴的な5本の溝があることなどから、5本の砲脚がある88式7センチ野戦高射砲を配備することを意識して構築されたものと考えられます。この大砲は主に航空機を標的にしていたようです。

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

HP <http://www.pref.okinawa.jp/edu>

入場無料

開所時間：午前9時～午後5時（入場は午後4時30分まで）

休 所：毎週月曜日、年末年始

国民の祝日（記念の日、文化的の日を除く）、聖霊の日（6月23日）

※月曜日が祝日と重なった時は、翌日の火曜日も休所

その他、臨時休所あり

通：沖縄自動車道西原 IC 上り線で約 10 分

市内線バス→ミナル発 市原バス停「植木附集落駅前」下車徒歩 3 分